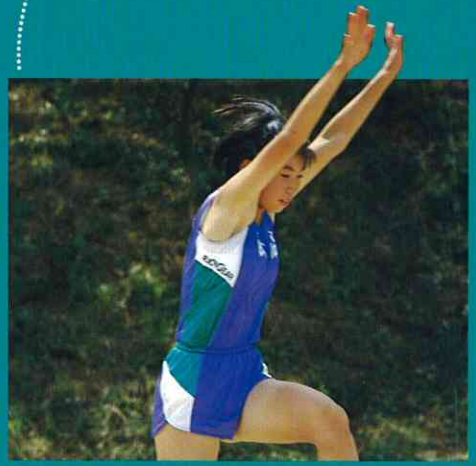
HOP
STEP
JUMP



風の街道・長船

Big Bang '95

長船町町勢要覧 **1995年12月**

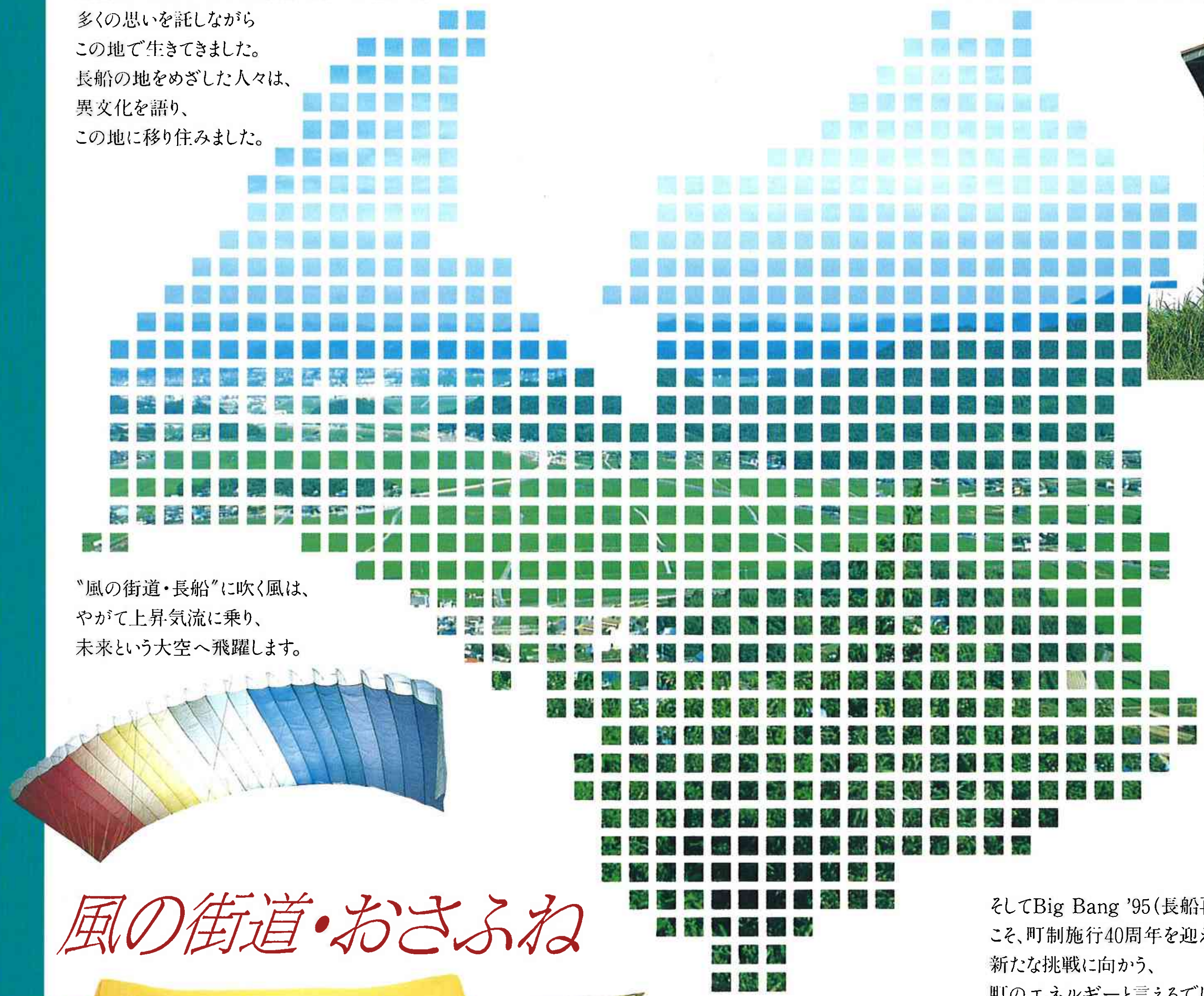
岡山県長船町

岡山県邑久郡長船町土師291
〒701-42 TEL.086926-2001

長 Big Bang '95 船

長船に生まれてきた人は、縄文時代の昔から、
多くの思いを託しながら
この地で生きてきました。
長船の地をめざした人々は、
異文化を語り、
この地に移り住みました。

風は、遠い彼方から文化を知識を人々の鼓動を
運んできました。
風が運んできた分子は、
この地で融合して、風土になりました。



"風の街道・長船"に吹く風は、
やがて上昇気流に乗り、
未来という大空へ飛躍します。

風の街道・おさふね

そしてBig Bang '95(長船再燃焼)
こそ、町制施行40周年を迎え
新たな挑戦に向かう、
町のエネルギーと言えるでしょう。

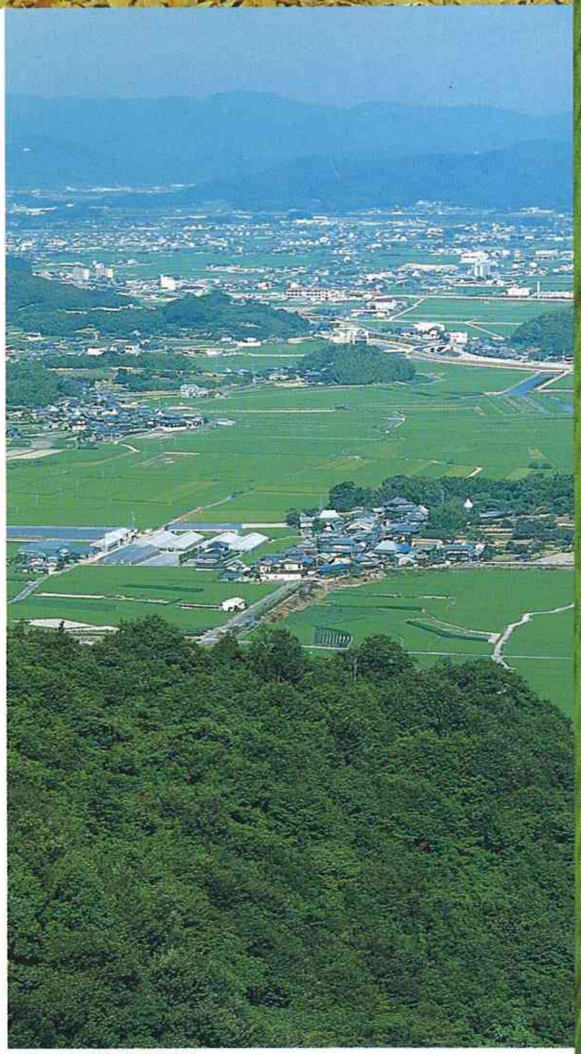
大地の恵み

長船町は「うるおいとやすらぎ　健康で文化的な地域づくり」を町勢振興の基本方針に、三つのK（景、慶、経）を重点目標としてまちづくりを推進しています。

町域は遠い昔から肥沃な土地と吉井川の水という自然条件に恵まれ、稲作農業を主産業として発展してきました。最近は農業基盤整備や大型機械の導入、新技術や作物の研究など、将来を期待される農業を目指して意欲的に取り組んでいます。

また、自然に恵まれた土地柄から、岡山市や備前市のベッドタウンとして年々人口が増加して都市化が進行しています。このため、バランスのとれた産業の育成を目指して、工業用地を確保し、積極的に企業を誘致してきました。

町を取り巻く交通網もめざましく発達しています。町内を走る国道二号線、ＪＲ赤穂線に加えて、岡山空港、瀬戸大橋、山陽自動車道などの開通で、岡山市へはもちろん、広島や四国、京阪神方面への時間距離の大幅短縮が実現しました。これらの大きな交通変革は、町内外に新たな交流を生み出す原動力となって、長船町が大きく動き出すチャンスをもたらしました。旧山陽道に接していたこの地は、吉井川の水運を利用して、平安時代中期から刀剣づくりで栄え、福岡の市という中国地方随一の大都市として繁栄しました。恵まれた自然環境を生かした先祖にならい、住みよいまちをつくろうと、花いっぱい運動や生涯学習活動などを積極的に進めています。



四辻山より長船平野を望む

福岡の町並み

地

古代、吉備国は大和や九州に匹敵する大国であった。各地の豪族を支配して吉備を治めた首長は、巨大な前方後円墳を造営して、その力を誇示した。支配下の豪族もそれにならって、それぞれの支配地に前方後円墳を造った。その数、県下に約百七十基。

そして、長船町に八基。

三方を囲む小高い山並みと、西を流れる吉井川が天然の要害となってこの地を守り、遠い先祖たちは広くて肥沃な大地の恵みを享受し続けてきた。須恵器を焼いて栄え、鉄を鍛えて刀剣で名を高め、市（いち）には諸国から人々が集まった。ときには吉井川が氾濫し、時代の波も押し寄せたが、大地の恵みは人々の流した汗水に報い続けてきた。

炎

中国山地を源とする吉井川が山間を抜けて平野部に出るあたりを、旧山陽道が横切る。この舟の道と街道の十字路に多くの刀鍛冶が住み、「備前長船」の名を全国に広めた長船や一文字派を生んだ福岡は、平安時代から室町時代にかけて、わが国随一の刀剣産地として高い技術水準と生産量を誇っていた。

鉄の芸術の粋といわれる日本刀の原料は玉鋼(たまはがね)。吉井川上流に産する砂鉄がたたらの炎をくぐって玉鋼になる。これを刀工が火花を散らしながら鍛えて刀の形に造り、研師が仕上げていく。この丹念な工程を繰り返した刀工たちの職人魂が、この町に息づく。

研師　柴田一豊氏

炎の芸術

長船町は「鍛冶屋千軒」とうたわれ、数々の名刀を生み出した刀剣王国として全国に知られています。その歴史は古く、吉井川の洪水による多大な被害を幾度か受けながらも、伝統の技と魂を今に受け継いできました。町には、備前刀を中心に展示する備前長船博物館をはじめ、刀剣の森、「一遍上人絵伝」で知られる福岡の市の町並み、社寺などたくさんの貴重な文化遺産が残り、往時がしのばれます。

先人の伝えたこれらの文化的土壌の上に、さらに新しい要素を加えようと、町民たちはさまざまな取り組みを続けています。「名刀備前長船」の伝統を現代に生かそうと厳しい修業を続ける刀工や研師たち。刀剣の"魂"にあやかろうと太鼓を叩き続ける「備前長船名刀太鼓」の面々。須恵器の伝統を持つ長船の地で粘土をこねて焼く備前焼作家たち。炎から生まれる芸術に、長船に伝わる刀職人の魂が生きているかのようです。

その魂は一方で町民の情熱をかきたて、びぜんおさふね名刀まつりや町民体育祭など新しいイベントを生み出しています。

びぜんおさふね名刀まつり

備前長船名刀太鼓

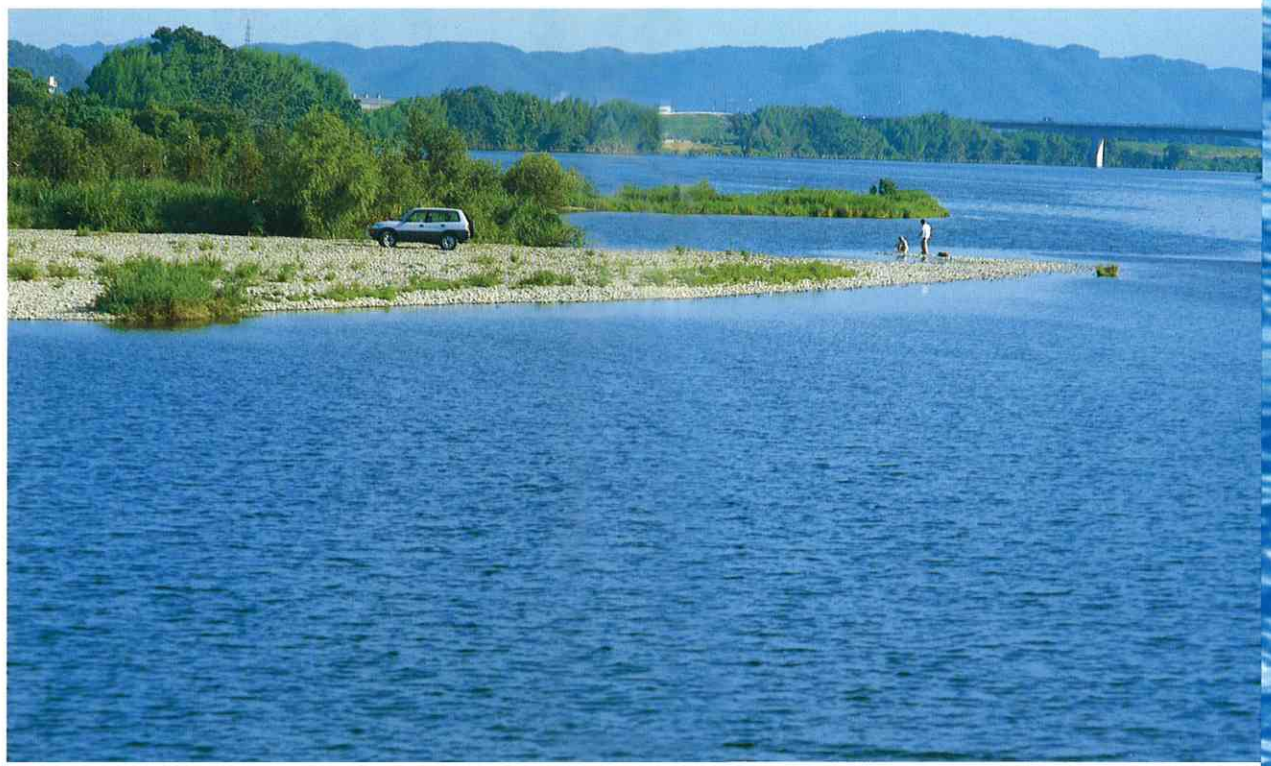
備前焼作家　髙原　敏氏

水

岡山県の一大河川の一つ、吉井川が長船町の西を流れる。現在は高い堤防が築かれ、東に広がる田園地帯や町並みを防護し、反対側の河川敷にはゴルフ場の芝生が緑のじゅうたんを広げる。

吉井川の流れは静かで、この地に住む人々に数々の恵みをもたらした。古くから肥沃な土を運び、稲田をうるおし、中世には上流からの玉鋼が刀産業を育て、水運は福岡の市を繁栄させた。ときに氾濫して、刀剣産地の繁栄まで流し去ったこともあったが、アユのはねる静かな流れは、いつの時代も人々の暮らしを支えてきた。

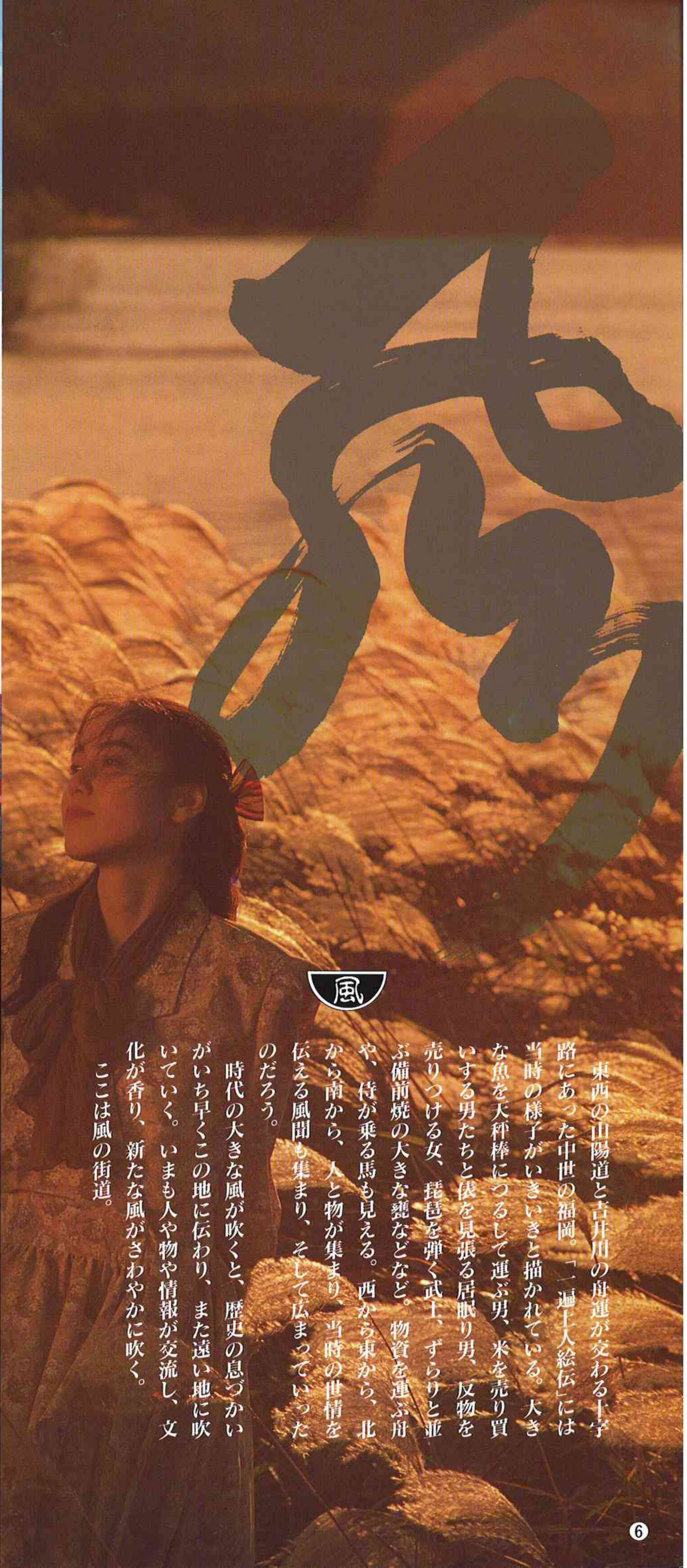
清き川の流れ



川は、道路や鉄道が発達するまでは、物や人が通る重要な〝道〟でした。高瀬舟という底の平たい川舟は、すでに室町時代には岡山県の川を運航していたようです。特に吉井川の高瀬舟は津山・西大寺間を盛んに行き来し、米、麦、酒、塩、油などさまざまな物資を運んでいました。十七世紀の初め、角倉了以は吉井川の高瀬舟を見て参考とし、京都の大堰川などを開発して舟運を開いたことはよく知られています。

美作の特産物である砂鉄を原料にした玉鋼も同様に舟で運ばれ、下流の山陽道近辺で刀剣づくりの素材となりました。吉井川の水運が刀剣の長船を育てたわけです。しかし、その刀剣のまちは、吉井川の大洪水によって衰微していき、同じように水運によって中世の商業都市として栄えた福岡も、吉井川の度重なる氾濫によって生活ぶりを示す文献資料は全く残っておらず、町の位置さえ特定できていません。町を繁栄させた吉井川が、その繁栄に幕を引いたという歴史の皮肉――。

今の吉井川にはもちろん高瀬舟の通うこともなく、川の上を東西に走る国道や新幹線の姿を、波静かな水面に流れるように映しています。

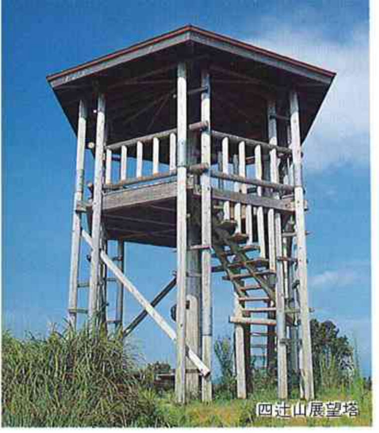


風

東西の山陽道と吉井川の舟運が交わる十字路にあった中世の福岡。「一遍上人絵伝」には当時の様子がいきいきと描かれている。大きな魚を天秤棒につるして運ぶ男、米を売り買いする男たちと俵を見張る居眠り男、反物を売りつける女、琵琶を弾く武士、ずらりと並ぶ備前焼の大きな甕などなど。物資を運ぶ舟や、侍が乗る馬も見える。西から東から、北から南から、人と物が集まり、当時の世情を伝える風聞も集まり、そして広まっていったのだろう。

時代の大きな風が吹くと、歴史の息づかいがいち早くこの地に伝わり、また遠い地に吹いていく。いまも人や物や情報が交流し、文化が香り、新たな風がさわやかに吹く。

ここは風の街道。



四辻山展望塔

諏訪神社まつり

風の街道

刀剣で栄えた長船町には刀に関する多くの史跡をはじめ、古墳、社寺など貴重な文化遺産が数多く残っています。観光客は、これらの史跡を探訪し、名刀を展示する備前長船博物館を訪れ、古式鍛刀の実演を見学し、福岡の町並みの散策を楽しみます。観光ルートを歩きながら、ふと目を閉じ耳を澄ますと、この地に吹いた歴史の風をほほに感じとれそうです。

須恵器の里にある「築山古墳」は、全長約九十mの前方後円墳です。後円部の上に露出している家形石棺は凝灰岩製で、はるばる九州阿蘇から運ばれたものだそうです。

「備前長船博物館」は、備前長船の名刀と刀剣資料、さらに町内で発掘された土師器、須恵器などの埋蔵文化財を展示しています。

江戸時代の長船鍛冶を代表する上野大掾祐定の霊を供養している備前刀工菩提寺「慈眼院」をはじめ、長船地区には多くの刀匠の魂が静かに眠っています。

「刀剣の森」は、足利尊氏が敗走中に立ち寄り、再起を祈願した所。願いが叶ったお礼に尊氏が寄進した九州日向の松が、この森の始まりと伝えられています。

吉井川沿いで山陽道の要衝にあった福岡は水陸の交通の便に恵まれ、中世の「福岡の市」は各地から商人が集まり大いに繁栄しました。

「妙興寺」には豊臣秀吉の知恵袋、黒田官兵衛（如水）の父祖の墓があります。官兵衛の子、長政が筑前（福岡県）に城を築いたとき、備前福岡を懐かしんで福岡城と名付けたと伝えられています。

「福岡城跡」の位置は諸説ありますが、吉井川の水で周囲を守っていた堅固な川城をめぐる攻防戦の伝承は数多く残されています。

福岡の家並み

JUMP

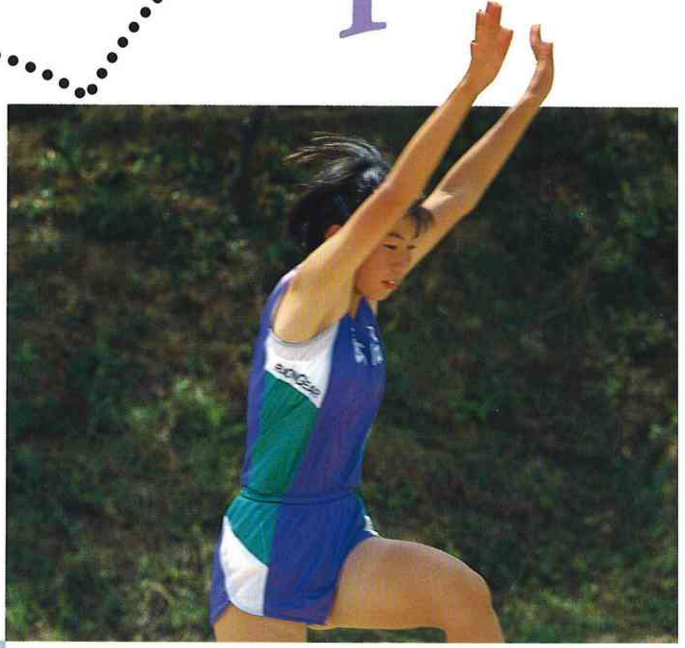
STEP

HOP

HOP!!
"ピョンと軽く跳んでみます。"
町民一人ひとりの小さな挑戦の始まりです。

STEP!!
"一歩一歩着実に大地を踏みしめ、行進を始めます。"
この大地は、自然の恵み豊かな地。
エネルギーあふれるその姿は、
四十周年を迎える長船町の姿でもあります。

JUMP!!
"思いっきり未来へ向かっての挑戦です。"
小さな一歩から着実に進歩した勢いは、
西暦二〇〇〇年に雄飛する長船町の姿です。



CONTENTS

大地の恵み……❶
炎の芸術……❷
清き川の流れ……❹
風の街道……❻
HOP STEP JUMP……❽
街道彷徨……❿
街道未来……⓬
燃焼／シンポジウム
「長船町の活性化に刀は力となるか?!」
基調講演（安立勝重／奥村とよ子）……⓮
パネルディスカッション……⓰
環境を生かした住みよいまちづくり
生活環境……㉒
生活基盤……㉔
心のふれあいを大切にするまちづくり
教　育……㉖
文　化……㉘
福祉・保健・医療……㉚
豊かで活力あるまちづくり
特産品……㉜
商工業……㉞
農　業……㊱
観　光……㊳
町長あいさつ……㊵
歳時記……㊷
HOP……㊹
河　川……㊺
STEP……㊻
JUMP……㊼
議　会……㊽
行政・名誉町民……㊾

街道彷徨

すべての道は長船に続いていた

その昔、山陽道を東へ歩き続けると美しい都があった。その道を都から人や物資が長船に通い、華やかな都の文化を伝えた。街道を西へ行くと海峡をへだてた九州に着く。異国船が運ぶ世界の文化や知識が、山陽道を通って長船に届いた。

吉井川は舟の道。上流に産する玉鋼を長船に運んで「鍛冶屋千軒」の発展を支え、たくさんの物資が「福岡の市」を育てた。下ると多島美の海。都と九州を結ぶ瀬戸内航路に乗って、刀工の鍛えた刀剣が「長船」の名を全国に広めた。

なるほど、すべての道は長船に続いていた。「地、炎、水」に恵まれ、時代の「風」をいっぱいに受けながら歩み続けてきた町は、やがて上昇気流という風に乗り、未来という大空へ雄飛する。

築山古墳（県指定文化財）

梵鐘（町指定文化財）

福岡地区 山車

花光寺山古墳（県指定文化財）

備前長船刀匠 各霊位供養宝塔

慈眼院

福岡の町並み

福岡城跡

天王社刀剣の森

広高八幡宮文字瓦（町指定文化財）

妙興寺・大いちょう

福岡の町並み

造剣古跡碑

福岡の市跡

街道未来

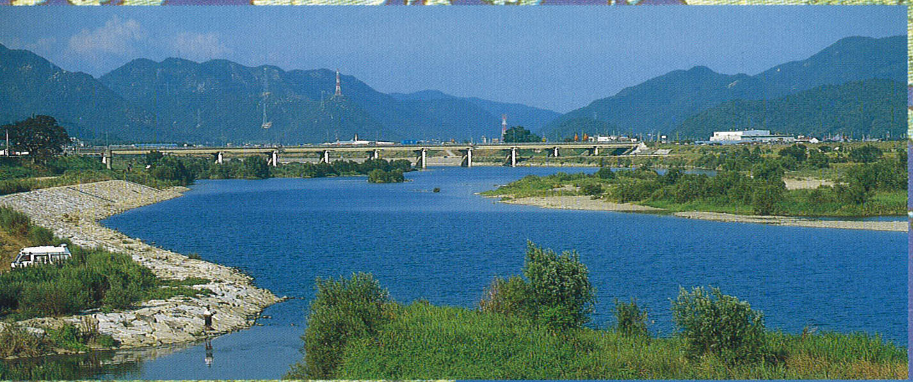
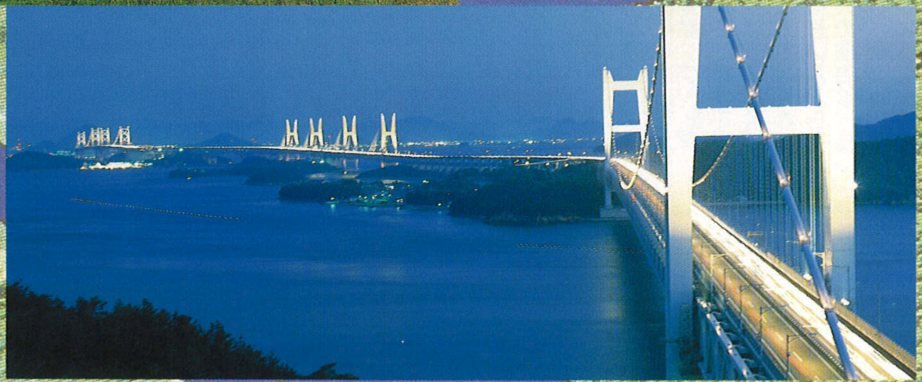
長船から世界へ

国道二号線と山陽新幹線が通る長船町は、岡山空港、瀬戸大橋、山陽自動車道に近く、これからも交通の要所に位置する。

交通に便利な長所を町勢や暮らしに生かす方策を伝統的に心得ている土地柄だけに、将来への期待は大きくふくらむ。

全国に延びる高速自動車道路は、野を走り、山を抜け、川を越え、海をも越えて、人と物を自在に運ぶ。新幹線のスピードは時間に余裕を生み、暮らしにゆとりを与える。近代的な岡山空港はまさに空の玄関。空路は国内から世界へと広がり、町は期待の翼を広げる。

長船から世界へ、空の道は未来の街道だ。

燃焼！シンポジウム

「刀剣のまちづくりとデザイン」

長船町の活性化に 刀は力となるか?! 町

かつて長船町は、「鍛冶屋千軒」などとも呼ばれ、備前長船の名刀の名で全国に知られるほどの「刀剣王国」として栄えた歴史ある町です。昭和57年には「備前長船博物館」が開館し、観光の拠点になっています。町内には刀鍛冶師や研師が在住し、また毎年秋に開かれている「びぜんおさふね名刀まつり」には、町内はもとより県内外より大勢の人々が訪れ、ハード・ソフト共に「刀剣」をテーマに施策の充実が施されてきました。

そして、長船町は今年で町制施行40周年を迎えようとしています。

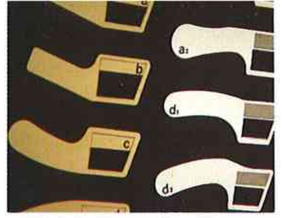
そこで、「刀剣のまち長船町」を再考し、日本の伝統文化でもある「刀剣」を切り口として、町をどのようにデザインし、地域づくりに生かしていくかをコンセプトに〝刀剣のまちづくりとデザイン『刀は力となるか⁉』〟と題したシンポジウムがDAODA（DAOデザイン研究会）の協力を得て開催されました。

シンポジウムでは、伝統の打刃物産業を活性化させた福井県武生市の「タケフナイフビレッジ」理事長の安立勝重さんと、「まあがれっと愛らんど」のイメージでまちづくりを成功させた滋賀県愛東町の民生課課長補佐の奥村とよ子さんの基調講演に始まり、地元代表者やDAODAのメンバーによるパネルディスカッションが活発に繰り広げられました。

●基調講演

越前打刃物とナイフビレッジと地域活性

タケフナイフビレッジ理事長　安　立　勝　重　氏



鉛筆削り専用ナイフ「スコラ」

越前打刃物は、七百年ほど前に京都の刀鍛冶が来て、刀を作るかたわら刃物を作ったのが始まりとされています。江戸時代には藩主の手厚い保護があって明治初期まで栄えましたが、それ以降はすたれていきました。現在武生市には五十軒ほどの同業者がいますが、私たちが作っている越前打刃物は備前長船の名刀のように全国にその名を知られた、いわば〝全国区〟ではなく、限られた地方で使われる日用品を生産してきた〝地方区〟ですので、このような衰退状況の中で、タケフナイフビレッジを創立して、何とか打刃物という地元の伝統産業品を守っていこうとしています。少し遅い感じもしますが、これから越前打刃物を全国区にしていこうというのが私たちの願望です。

その活動が皆さんのまちづくりに少しでも参考になるのではと、ここにお招きいただいたのだろうと思っています。

私たち十一人は十年ほど前から川崎和男というインダストリアルデザイナーを迎えて、工業デザインを取り入れながら、いままでの鍛造技法に代わる新しい消費者のニーズにあった商品づくりを進めてきました。その十一人が結束した活動の中からこういう新しい工房が完成しました。協同工場なので注目を浴びまして、視察や取材が相次ぎました。

この工房を基礎にして、私たちの製品を〝全国区〟にしていきたいとがんばっています。越前打刃物は産元の問屋に納めてきましたが、戦後の流通のシステムの中で、その問屋が有名生産地のブランドで売るようになったため、武生の越前打刃物が兵庫県の三木、大阪の堺というような有名所の製品となって市場に出ていました。そのくやしさがありますので、これから私たちは独自の越前ブランドを確立して〝全国区〟になりたいと常々思っているわけです。そういう思いが、こういう活動を生んできたのだと思います。

最近では他の産地は機械化を進めて大量生産低コストの商品を生産していますので、あくまで鍛造技術にこだわっている私たちは立ち遅れたような感じが強くします。しかしながら、私たちはそれに気がつくのが少し遅いとは思いながらも工房建設に踏み切った最大の理由は、私たちの作っている打刃物は、例えば円高で外国から安く入ってくるような安物とは違うんだ、付加価値の高い商品なんだということを消費者に知っていただいて買っていただこう、そして将来は〝全国区〟にしていこう、と思っているからです。

シンポジウムのテーマ「地域活性化」の面から見ますと、私たちは地域活性化をしようと思ってやったわけではなくて、いままで話しましたように、自分たちの目的のために動いたことが業界の刺激になったということです。それから、工房のある東野という場所は万葉の昔からの伝統がある古い地区です。工房を建てる場所をさがしていたころ、東野の人が地区の活性化を模索していると聞いて、私たちが土地をさがしていることを話したところ、それは幸いと私たちを迎え入れていただきました。私たちのロマンを求める活動が東野地区の活性化に結びついた形になりました。もう一つ、武生の市長が県外へ出張の時、伝統的工芸品として打刃物を熱心に宣伝してくださいます。じり貧の業界でしたが、私たちの粘り強い活動が認められたのでしょうか、現在では武生市自体が地場産業である武生打刃物の再興活動を盛り立て、私たちの活動を応援してくださいます。助成金もいただきました。そういう意味では我々は非常にめぐまれていると思います。

今日のシンポジウムで、私がどれほど力になれるか不安ですが、いろんな経験をしてみて思うことは、皆さんがどうしたらいいかよく考えて、その中で行動を起こすことが先ではないかということです。あれやこれやと考えていると、かえってできません。私たち十一人には後継者の不安をかかえている者もいますが、そんなこと考えていたら今のタケフナイフビレッジはできなかったでしょう。

以上、私たちの活動の全体像をご覧いただきました。とにかく私たちは自分たちの考える方向にやってきて、それが結果として地域活性化の活力になったと思っています。すべてがうまくいくとは思いませんが、私たちの活動を参考にしていただければと思っています。それからぜひタケフナイフビレッジへお寄りください。どうもありがとうございました。

安　立　勝　重《あんりゅう　かつしげ》

タケフナイフビレッジ理事長。
昭和15年4月30日武生市出身。
昭和34年福井県立武生高校卒業、4代目として家業（打刃物）を継ぐ。昭和48年1月武生刃物研究会設立。昭和54年全国打刃物業界では初めて伝統的工芸品の指定を受ける。昭和57年9月タケフナイフビレッジ設立。昭和54年～平成2年越前打刃物協同組合に。平成3年8月タケフナイフビレッジ（協）理事長就任。ヒマラヤトレッキング、モンブラン、アイガー、マッターホルンなど登頂。昭和58年武生市体育功労賞、昭和62年福井県体育功労賞受賞。趣味、登山・スキー等。

●基調講演

まあがれっと愛らんどとCIでのまちづくり

滋賀県愛東町民生課課長補佐　奥　村　と　よ　子　氏

CIで統一されたサイン類

現在、私は役場で老人保健福祉の仕事をしています。そのかたわら昭和五十八年からまちづくりプロジェクトに入って、自分のライフワークとして午後五時以降はまちづくりを精いっぱいやってきました。仕事として企画やまちづくりを担当したことは一度もありませんが、まちづくりは私にはどうしても欠かせない仕事だと思って、一生懸命やることをモットーにしてきました。

愛東町は滋賀県の琵琶湖の東に位置し、人口は五、八六四人。所帯数は約千三百戸。人口はずっと自然増の町。農業中心の町で、特産物はブドウ、ナシ、メロン、キーウィ、トマト、イチゴ、ハクサイ、茶、何でも作れます。特に果樹の栽培は盛んで、京都市場では定評のある町です。農業はほ場整備、農村総合モデル事業を行い、農村下水道事業は全戸完備しています。そしてほとんどの家がボタン一つで生活できるというような、かなり快適な町なのです。

ところが財源は税収として六億円足らずで、お金のない財政力の乏しい町なのです。そんな中で町の活性化を考えるうちに、みんなで知恵を出し合って手作りで愛のまちづくりをしようという思いが職員の中から生まれました。そして、ソフトな部分を女性職員が受け持ちました。チームの名は愛東町女性CIチームとし、その活動が今年で十年目です。

その経験を各地で話してきましたが、今回初めて岡山県を訪れ、長船町でお話することになりました。町の規模も歴史も違いますので、参考になるかどうか分かりませんが、愛のまちづくりを進めた理由や職員の動き、町を動かしていく様子などを収録したビデオをまず見ていただきます。これは平成五年にNHKが製作した番組のビデオです。

ビデオは「はい、愛の町、愛東町でございます」と、職員が電話にでるシーンから始まり、窓口応対や優しい言葉づかいの励行など、身近なことから変えていったことを説明。職員は午前九時から午後五時だけでなく一日二十四時間すべてを仕事時間とし、行政はサービス業務との考えで積極的に愛のまちづくりを進めている姿を紹介している。奥村さんは愛のまちづくりについて、「女性の目から見て、こんな町にしてみたいとか、こんな町だったらいいなというようなことをいろいろ考えましたが、やっぱり花がいっぱい咲いていて、温かい人がいっぱい住んでいて、愛東町はちょっと違うぞ、そんな町にしたかったですね」「男性ではできない部分を女性でやりたかったし、愛というのは男性にはすごく苦手な分野だと思いますので、愛にこだわった手作りのまちづくりをやりたいと考えました。それが私たちの活動がずっと続けられた要因だと思います」と話している。

愛東町ではCIを導入して、この「まあがれっと愛らんど」というロゴマークを制定しました。町民の意識改革を始めるのに、こういうロゴマークが効果を発揮します。マーガレットは町の花、それから愛東町の愛、らんどは国という意味で、合わせて「マーガレットがいっぱい咲いていて、温かい思いやりのある人がいっぱい住む愛東町」を表しています。これは町のマークであって、役場のマークではありません。まあがれっと愛らんど＝愛東町なのです。このロゴマークに、職員と町民の思いを込めて、まちづくりをこれからやるんですよという意識を持っていこうということで始めました。

新庁舎になったのを契機に掲げた「変わります。町も庁舎も職員も」という合言葉やロゴの付いた商品やステーショナリーを作ったのは、要はこのこだわりでもって町民の意識を変え、そして職員のヤル気を刺激して町を変えていこうという気持ちのあらわれです。それで、究極の目標は「住んでよかったと思える町」「住みたい町」にすることです。全国に約三千三百の自治体がありますが、どうしても愛東町をキラリと光る町にしたい。活動を愛のまちにこだわって、花を植えたり、いろんな物を作ったりしてきました。

どうぞ皆さん、今日を契機にがんばってください。

長船町でもいろいろと活性化に取り組んでおられると思いますが、どこかキラリと光る町にして、子供たちに何が残せるか考えて、職員も町民も一体となったまちづくりを進めていただきたいと思います。

奥村とよ子《おくむら　とよこ》

愛東町民生課課長補佐。
滋賀県愛東町出身。昭和44年愛東町役場職員に採用。昭和50年にまちづくりプロジェクトチームに参加。昭和61年愛東町女性職員による〝CIチーム発足〟サブリーダーとして「まあがれっと愛らんど」「愛の田園（まち）愛東町」のイメージPRを展開。平成元年女性問題を研修するために調査団員として、オランダ、イギリス、ドイツを訪問。平成2年より3年間、リーダーとして14名の仲間とともに「まちづくりはみんなの力で！」を合い言葉に活躍。仕事も趣味も〝一生懸命〟がモットー。

燃焼！シンポジウム 長船町の活性化に 刀は力となるか？！

町

基調講演に引き続き、長船町代表者やデザイン関係者など多彩なメンバーでパネルディスカッションが行われました。長船町中央公民館に集まった、地元の商工関係者や町民、また町外から「シンポジウム聴講バスツアー」で訪れた聴衆が熱心に聞き入りました。

長船町の活性化と刀を考える

加藤　名刀のふるさと、長船町の活性化のために「刀は力となるか」というテーマでお話いただきますが、まずはご自分のテーマと刀への思いなどをお話ください。

真鍋　私が勤務している中国デザイン専門学校が来年から島根県横田町に、町の「手作り村構想」の一つとして工芸学校を開設することになって、いま準備を進めているところです。横田町は日本美術刀剣保存協会の活動で昭和五十二年から日本刀の原料になる玉鋼を生産しており、全国の約二百五十人の刀匠に供給しています。刀剣に関係の深い横田町の活動から長船町の活性化の参考になることをお話しできたらと思っています。

久保　私は企業人ですので、企業という立場からまちづくりを考えると、まず町の持っている資源を広げていく方策に目が向きます。私どもの企業はプロペラという資源を持っていて、いろんなプロペラを作る過程から思いがけない製品が生まれてくることがあります。例えば音のしない合金製のプロペラをPRするために作ったベルからメロディーベルという商品が生まれました。コンピュータの力で十七歳の宮本武蔵像を描いて、立体像にしたこともあります。これを原画にした像は武蔵生誕の地、大原町に建ちました。これらはゼロから出発したものではなくて、プロペラ製作の過程から生まれた製品です。そういうこ

久保博尚《くぼ　ひろなお》
ナカシマプロペラ㈱新規事業室室長。
総社市出身。1977年東海大学航空宇宙学科卒業。1977年流体力学によるプロペラスの研究開発に従事。1990年ナカシマプロペラ㈱新規事業室長に就任。コンピュータを利用した立体造形事業を推進。DAODA会員。

タケフナイフビレッジを紹介する安立さん

とをしてきた企業人の目から見て、長船町の持っている資源を広げるにはどうしたらいいか一緒に考えていきたいと思っています。

池田　私は昨年まで九年間、備前長船博物館の学芸員を勤めました。町外の人に長船町を紹介する時に、いつも「名刀備前長船の産地だった所です」と紹介していました。先日福岡県へ行った時に同様に紹介したら、相手は五十歳ぐらいの人でしたが、名刀備前長船が通じないんですね。博物館にいた時も旅行会社の添乗員からよく電話があって、長船という漢字が読めないで「ながふねちょう」と呼ばれたりしました。そういう現状を前提に、刀について考えていきたいと思います。

加藤　安立さんは基調講演で「自分たちは地域おこしをしたわけではない。一生懸命やっていたら、それが地域おこしになった」というお話でしたね。

安立　はい。私たちの父親世代は手作り鍛造にこだわって、それが結果的に他の産地に負け、産業として先細りの状況に追い込まれていました。それが私たちの代になって越前打刃物をどうしていくかと考えた時に、やはり自分たちが今立ち上がらないといけない、これが最後のチャンスだろうと考えたわけです。それと、周囲には武生の伝統産業を守れという声があり、私たちは自分たちの時代に伝統の灯を消したくないという気持ちが強くありました。それがナイフビレッジを作らせたのだと考えています。

CIマークを説明する奥村さん

加藤　奥村さん、講演にプラスするお話があれば。

奥村　女性職員のまちづくりは、自分たちの仕事以外のところで町がどう動いているのか勉強して、町民から聞かれたら何でも答えられる職員になろうと考えて勉強し始めたのがきっかけでした。それから、CIを導入したのは、今は感性の時代だから、例えば封筒なら従来の茶封筒よりもちょっとおしゃれな封筒にして愛東町を自信を持ってPRしたいという気持ちがあったんです。それでまず手がけたのが町の封筒、罫紙、名刺などのステーショナリーです。名刺は職員から町長まで同じマーガレットのマーク入りです。どんな物にもマーガレットのマークを入れることから始めました。そうして職員の意識をまず変えていきました。次に町民にアピールするために、Tシャツやトレーナーを作ったり、町営バスは一目で分かるように真っ赤なボディーデザインにしました。これには相当強い反対がありましたが、実は走るCIになって一番効果があったんです。町外に行っても愛東町のバスとすぐ分かります。

それからCIで経済効果を上げることも考えて、例えば愛のまちづくりのために花を植える。住民が花街道を作ると、住民同士のコミュニケーションが活発になる。道がきれいになると、空き缶のぽい捨てがなくなる。花を売ってほしいという声には、栽培グループができて町外へもたくさん出荷する。女性職員のちょっとしたアイデアが、町民の意識を変えて町を美しくしてきたわけです。最近では環境問題に取り組むために、全国で初めてのプラントを導入して、家庭の排油から燃料を作ったりしています。

加藤　刀づくりに関係の深い島根県横田町でいろいろ活動されている真鍋さん、たたら作りも見てこられたそうですね。

真鍋　去年見学する機会がありましたが、感動しました。独特の炉に砂鉄と木炭を交互に投入しながら三日三晩、焚き続けます。いつ砂鉄を入れていつ木炭を入れるか、間合いを計りながら作業を指揮する人を村下(むらげ)と言います。その村下は全国に二人だけで、二人とも横田町の人です。一人は安倍さんというお年寄りで、実際に活動できるのは木原さんという村下だけです。たたらと刀剣館では、炉の構造がわかるように展示したり、たたら操業の様子をビデオで紹介しています。備前の古い刀も展示してあります。町の刀工四人の作品も展示してあります。町は刀剣館を作るほどですから、刀やたたらをとても大切にしています。ヤマタノオロチの地元ですから、オロチの尾から出た鉄剣は日本で最初の鉄剣だから、横田が鉄剣のふるさとであって長船町ではないという気持ちもあるようです。

長い伝統のあるたたらも実は一時途絶えて、安倍さんの尽力で昔のたたら製鉄がよみがえったという経緯があります。安倍さんがいなかったら、今の日本刀の材料もなかったかもしれません。そういう意味ではたたらの伝統と玉鋼を作ることに誇りを持っていらっしゃる木原さんの仕事ぶりは威厳に満ちていて、みそぎをしてから仕事を始めるような、非常に近寄りがたいものを私は感じました。そういう環境の中に伝統がきちんと残っているのだと思いました。

加藤　たたらは長船町に関連が深いわけですが、刀に対する長船町の取り組みはいかがでしょう。

池田　刀は武器であるという一面を持っていまして、なかなか一般には受け入れが難しい面があるのではないかと思います。備前長船博物館は年間三万人ほどの入館者がありますが、入ってもわずか十分か二十分で出る人が大半です。ですから、刀剣は特に若い人にとってはなじみのない、興味の対象になりえない物ではないかと思います。それと長船町は刀剣の町をPRしていますが、刀だけでは現代の人にはなかなか受け入れられないのではないかと思います。

加藤　そういう現実はあるようですが、反対に刃物で地域おこしをされている安立さん、ビデオに出ていました工房の独特の設計には何か由来があるんですか。

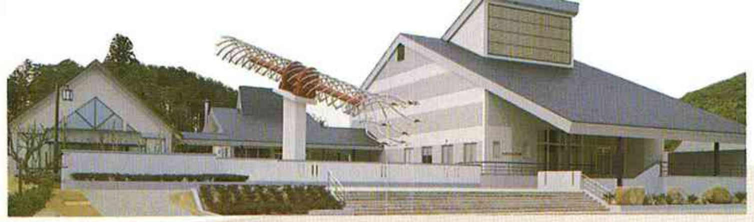
安立　当初からユニークな建物にと思っていましたところ、毛綱毅曠の建築により、火と鉄と水の神様が舞い降りるような建物という意味あいを持たせ、最終的にああいう丸い形の建物になりました。

長船町のキーワードを探る

加藤　ひとつのシンボルとして建てられたと思いますが、そういったこともまちづくりには必要なことだろうと思います。カリヨンが似合いそうな工房ですが、メロディーベルは鉄製ですか。

久保　ベルは銅合金です。今のお話に関連があるかも知れませんが、今日のシンポジウムのテーマの「刀は力となるか」には、私のような企業の者から見ますと「当然力になるんじゃないの」と思えます。新しい事業やまちおこしを始める時は、一般的にキーワードを探すのが非常に難しい。愛東町では愛という字から出発して、抽象的な概念をキーワードとして育てる努力をしている。企業ならそこからどんどん拡大志向でもっともっと広げていきます。まちづくりではそうはいかないかもしれませんが、持っている資源を伸ばしたり、よりよい方向にしていこうとする動きは、企業にもまちづくりにも共通していると思います。

そういう目で見ますと、長船町には日本刀というはっきりしたキーワードがあります。しかも、技術のレベルが高くて職人芸の伝統も息づいていて、これはもう折り紙付きの資源だと思うわけで、これを伸ばしていくのは当然のことだと思います。長船町にはもう一つ、福岡という中世に栄え


横田町「奥出雲たたらと刀剣館」

真鍋芳生〈まなべ　ほうせい〉
中国デザイン専門学校教授・新学科準備室室長。愛媛県西条市出身。1968年金沢美術工芸大学卒業。インダストリアルデザイン、クラフトデザインを教える傍ら、鬼面を創作。東京銀座、ミラノ、ベニス、パリなど世界各地で個展を開く。ミラノの個展がきっかけで始めた〝くらしき・イタリアクラフト交流展〟の団長として、今年12月に倉敷のクラフト作家の作品展をベニスで計画、渡伊の予定。DAODA会員。

加藤俊明〈かとう　としあき〉
JR西日本岡山営業開発室室長(邑久町在住)。岡山市出身。1964年旧国鉄入社。1988年国鉄民営化、JR西日本配属。JR中庄駅駅長を経て、現在に至る。岡山のまつり〝うらじゃ〟や、邑久町〝バルーン・ミーティング〟など各地で地域づくりに参画。岡山・地域づくり交流会会員。

当日のシンポジウムは白熱し、質疑応答も活発に行われました。

質問　刀を力にするには、長船町にもっと多くの刀工に定住してもらって、それぞれの一級技術を交流させて、さらに高めることで刀の新しい可能性が開け、名刀備前長船の名が現代によみがえるのではないかと思います。しかしそこには秘伝の公開という課題があります。そこでタケフナイフビレッジでは、安立さんの父親世代ができなかった技術の結集や一か所での分業製作体制をどうやって作られたのでしょうか。(元長船町役場嘱託　佐藤淑郎氏　岡山市在住)

安立　私たちの父親は職人肌で、お互いに技術はなかなか見せないという面が多分にありました。それでも伝統の灯を守ってきましたが、私たちの世代になると他の産地がどんどん大きくなって、越前打刃物がじり貧になってきました。それで仲間たちと生き残る道を求めて、いまさらお互いが意地を張っていてどうするか、親父たちの時代は終わったのだ、それでないと先へ進めない、という話を相当しました。そんな危機感があったから、十一人がまとまって前向きにやっていこうと盛り上がったのだと思います。そうなるまでの活動を通してお互いの心が知れてきたこともよかったです。しかし、実際にはお金の問題がからみますので非常にシビアになりますから、公平に運営することにかなり気を使っています。お互いに人の気持ちを理解しあいながら進めることが大事になります。

佐藤淑郎さん

火造り鍛造

質問　久保さんにお聞きします。刀の歴史が一目で分かる刀剣歴史館のようなものは日本にありますか。古い刀から昭和まで時代ごとに刀の形が違います。戦国時代や江戸時代には、足軽と大将では使っていた刀は違います。そこで刀剣の時代的な変化の中で、備前長船の名刀がどう位置づけられ、どのように優れていたのか比較できるような歴史館があればと思います。今の備前長船博物館は中世に栄えていた時代が中心で、歴史を通した展示はされていませんので。それから、そういう歴史館を長船に建てて、お客を呼ぶということには無理があるでしょうか。(長船町身体障害者福祉協会会長・小野田寛氏　長船町在住)

久保　歴史館は存じません。私が知らないだけかもしれませんが、ドイツには武器や兵器の資料館があって、それぞれの武器の歴史的な説明、用途などがかなり克明に示されていると聞いています。

歴史館の運営には、集めて調べて展示するいわゆる博物館的な方法もありますが、私はさっき話したインターネットのような手段で、世界に向けて日本刀の歴史と有名産地だった長船の位置づけを表現したい。設備としての歴史館以外に、電話回線やネットワークを使って、見たい人が自宅にいながらにして分かるような歴史館にしたらどうかと思います。それから自宅でCD-ROMという光ディスクで見ることも多くなっていますので、これに歴史館の資料を納めたら、歴史の苦手な若い人でもなじみやすいでしょう。分厚くて高価な資料本はなかなか見ないと思いますが、安価でコンパクトなディスクなら、パソコンで調べたりできるし、かなり見方は違ってくると思います。昔は資料館へ行って分厚い本を開いて調べていましたが、最近はメディアの発達のおかげで、自宅で自由に調べられるようになりつつあります。そういう新しい表現方法を使うと歴史館の可能性は広がると思います。

㊤小野田寛さん
㊦橋ヶ谷佳正さん

長船町の活性化に 刀は力となるか?!

池田　浩《いけだ　ひろし》
長船町教育委員会　社会教育課主任。長崎県出身。
1985年長船町教育委員会に採用。備前長船博物館勤務。

た商業都市の町並みが残っています。私はシンポジウムに備えて自転車で二回ほど取材に行きましたが、歴史を大事にしたきれいな町並みにとても魅力を感じました。ここのキーワードは、人とのコミュニケーションだと思います。したがって、長船町には二つの領域のキーワードがあることになります。一つは刀剣、もう一つは福岡というかつての商業都市。これを今風の解釈をして広げていくということは非常に魅力的だなと思いますが、いかがでしょう。

実は企業が行きづまった時、こういう考え方をよくします。例えば缶を作っている会社がある。ブリキの缶だけ作っていた会社で、年商一億円しかない。いくらがんばっても二億円どまり。そこで少し見方を変えて、缶は物を包む物だから包む領域をやろうと考える。缶だけでなく紙も加えてみようということになると、すぐに三億、五億になる。要は少し領域を広げて一般化していって、その部分に商品なり物とか考え方を広げていこうということなのです。

この考えを応用すると、日本刀にはいろんな要素があります。美術工芸品という要素、物を切るという要素、素材から鉄という要素、金属という要素もあります。職人芸という要素、兵器という要素、それから戦争、日本という要素、神様、そういったいろんな要素をこの刀剣が持っていると思います。それをうまく広げて組み合わせて新しい領域へ持っていけば、相当に力のある活動ができるのではないかというのが、企業人として見た私の感想です。

加藤　刀からいろいろな広がりが期待できるというお話ですが、ほかに長船町への提案をお願いします。

刀の解釈を広げてみれば新しいキーワードが見えてくる。

奥村　滋賀県の事例ですが、銅鐸がたくさん出土する野洲町という町があります。その町の職員さんが視察に来られて「銅鐸は昔の楽器らしいが、あれでまちづくりはできん。叩いたらカーンと音がするだけや。地味すぎてどうにもならん」と。確かに、たくさん出土した銅鐸を町の銅鐸博物館に展示して、銅鐸の町として売り込んでいますが、それ以上の伸びがありません。銅鐸のまんじゅうやせんべいを作るにしても、地味すぎて楽しくないのではっきりした方向性が見いだせないというう現状です。

それから信楽町という焼き物の町があります。皆さんもご存じのようにうどん屋さんにあるタヌキの置物は、すべて信楽産だそうです。信楽では火鉢や植木鉢を作っていたんですが、ある人の思いつきでタヌキの置物が生まれて人気を呼びましたが、今ではほとんど全国に行き渡りまして、売れ行きが伸び悩んでいるそうです。これは工芸ですので後継者難の問題もあって、組合も大変悩んでいるというのが現状だそうです。

それで長船町の刀ですが、刀は優れた美術工芸品ではありますが、人を殺したり傷つける武器でもあるし、大変冷たくて地味なもののように思います。さきほど備前長船博物館にも行きましたが、ピカーッと光っていて、確かにより切れそうやなあというだけで、説明していただかないとそれ以上に感じるものが何もない。しかし年間に訪れるお客さんが三万人もいるのは何かもったいないという気がします。もっといろんなサービスがあればと思いました。国道から入る道を分かりやすくすることも大事だと思います。実は愛東町も通過される町でしたが、基幹産業の農業を生かして農産物を販売できる道の駅「マーガレットステーション」を誘致したところです。こういう新しい展開を進めていかないと、ただ守ったり頼っているだけでは活性化は望めないと思います。

刀から私が連想したことは、まず刀というと「宮本武蔵」、切れ物といったら「ゾーリンゲン」、童謡が好きなので歌でいうと「村の鍛冶屋」、と頭に浮かびました。そういうところからキャラクターマークを考えて、刀自体の地味さから脱することも考えられたらいかがでしょうか。

加藤　刀の販売を考えると、シンボルマークとかいろいろな手段が必要だと思います。それをうまく進めているタケフナイフビレッジではマークとかいろんな販売方策は皆さんで考えられたんですか。

安立　そうです。私たちは家庭用の刃物を作って、いろいろ工夫して販売してきました。越前打刃物は昭和五十四年に伝統的工芸品に指定され、伝統工芸士も十数人いますが、備前長船の名刀のような美術工芸品ではなくて家庭で使われる実用品ですので、伝統工芸品であってもそれがすぐに安定した収入に結びつくわけではありません。そんな中で伝統を守ろうとすると、後継者の問題もありますし、生活できるだけの収入が保証されないと、意地張って伝統を守っていくんだとは言えません。やっぱりそれなりの環境づくりをしないと伝承もしていけないと思います。その点、名刀長船の名は全国的に知られていますので、長船町全体で盛り上げれば、いい形になるのではないかと私は思っています。

加藤　越前打刃物を新しい形で再興されている活動の中から、長船町への提言や提案があればお願いします。後継者の問題とか生活基盤の問題もあるでしょうが。

まち全体の盛り上げが良い結果をもたらす

安立　私たちの父親の世代のように伝統工芸を守るだけ伝承するだけではなくて、攻めることを考えて、タケフナイフビレッジのような活動が生まれました。〝全国区〟にしたいという夢も持っています。武生市には刃物の町らしい目印もありませんので、市長さんにお願いして国道に刃物の町のモニュメントを建てていただくようにお願いしています。長船町はその点、すでに名刀備前長船という名前がありますので、町全体で刀匠を盛り上げていきながら、昔の刀剣産地に復活していただきたいと私は思っています。

加藤　長船町の取り組みはいかがですか。

池田　久保さんのお話を聞いていて、私は頭が固かったなと思いました。刀剣を見る場合、美術品として見る目と、精神的なものの象徴として見る目の二つの見方だけをしていました。特に刀剣には精神的なものがよく求められて、三種の神器では玉と鏡ともう一つが剣です。そういう二つの見方しかしていなかったのですが、さきほど久保さんの話からいろんな面から刀を見ることの大切さを知りました。今は見方を広げていくところから何か可能性が開けていくんではないかと感じています。

加藤　さきほどの愛東町の道の駅「マーガレットステーション」の話がありましたが。

奥村　愛東町は高齢化率が二〇%でお年寄りが多く、しかもみんな元気なんです。要援護老人率という、寝たきりとか痴呆になる率が滋賀県で一番低い町です。そういう元気な高齢者が生き甲斐を持って暮らせるように、町では多品目少量生産といって、ネギ、ニラ、カブラ、ダイコン、ホウレンソウ、チンゲンサイ、コマツナ、そういう野菜の栽培を奨励しています。すると家庭では使い切れないほど育ちます。そこで、野菜直売所を設けて、お年寄りが朝採れた野菜を袋に入れて百円とか二百円の値段を付けて直売所へ持っていくようにしていました。売れ残りはその日か次の日に取りに行くので、その日に採れた新鮮な物だけを売る。それが大評判で、国道を通るお客さんが買うほか、町内の主婦も買いに来る。これをもうひと工夫して、道の駅に相乗りをして「マーガレットステーション」と名づけました。野菜の直売所のほかに、これからは若い人がいっぱい来てくれる町にしたいので、ハーブ教室でポプリを作ったり、ハーブを使った料理教室を開いたり、花を植えてつり下げるハンキングの講習をしたり、そういう工夫もこらしています。

久保　奥村さんのお話は、一言で言えば愛を広げることのようですね。何かやるときのキーワードが愛だと。そのキーワードを日本刀に変えて、長船町の刀の未来を考えると分かりやすい。このキーワードを広げるには選択肢は「拾う」「捨てる」「広げる」の三つだけだと思います。「拾う」は、例えば純粋な日本刀の形で拾うとなると、美術館や博物館で、日本の中で兵器としての刀の位置づけとか、日本刀にまつわる精神とか、そういう研究や展示をきちんとしていく方法があると思います。「捨てる」とは、ほっとくことです。ほっとくとどんどんすたれて後継者もいなくなるし、だれも面倒を見ない。やがて備前長船なんて言葉も消えます。

「広げる」方法はいっぱいあります。例えばタケフナイフビレッジのように、刀の領域を刃物からナイフに広げて、一つの商品ができてまちおこしになっていく。博物館の隣に売店で切りだし小刀や包丁を売っていますが、あの路線を発展させる方法があると思う。それから、切るということを考えると、例えば金属が鉛筆を削るように切れるナイフがあったら売れますよ。それだけで町は食っていけるかもしれない。それを売るにも、売店だけではなくて、インターネットを使う。パソコンがインターネットで世界とつながる時代です。「日本の鍛刀技術で作ったオサフネナイフは鉛筆を削るように金属を削ることができる」と情報を入れるだけで、世界から問い合わせが殺到するでしょう。インターネットは電話と同じような感覚で使えて、絵も音も出ます。それで長船町の情報を伝えていったらどうでしょう。

真鍋　同じようなことを私も思っています。長船町は名刀の里だということを知っている人が少なくなってきているのだから、すでに風化は始まっていて、刀の産地長船はもうないのかもしれません。ただし、僕の個人的な気持ちとしては刀匠をもっと増やして産地として残してほしい、これが私の結論です。鋼と軟鉄を組み合わせて作る日本刀ほど切れる刃物は、世界中どこにもありません。世界の人が注目している文化です。それと刀に付属する鞘や鍔に関しては、滅びかけている製作技術があります。大英博物館には日本の鍔のコレクションがあります。それほど価値の高い物なのです。それらの技術者を残す意味でも備前長船を残してほしい。

加藤　「刀は力となるか」という問いかけがテーマでしたが「なるのだ」という力強い結論が出たようですね。長船のまちづくりに良い影響をもたらす話ができたと思います。本日はありがとうございました。

質問　愛東町のまちづくりは、女性がやったからできたのだろうと感じました。その女性の目で刀を見るとどんな可能性がありますか。刀で女性に関係あるのは、例えば時代劇でお姫様が身に付けている護身刀があります。そういう、女性の目で刀を見たらという話を期待していました。考え方を刀から出発して女性が刀をどうとらえて、どうまちづくりに生かすかというような視点があってもいいのではないかと思いますが、いかがでしょう。

（岡山大学教育学部助教授・橋ケ谷佳正氏）

奥村　愛東町の基幹産業の農業は、男性のハードな部分で進んできていますので、それ以外に愛東町のまちづくりで考えることはないのかとずいぶん考えていました。滋賀県はどこの町でも田園風景が広がって、山がきれいで、川もきれいで、ほとんど同じ町なんです。だからそこに一味欲しかったので、これは女性の力で何とかしようと思って考えて「愛」に注目して、いろんな活動を女性の目から見て変えたり、新しく作ったりしてきたわけです。女性の立場から見た刀ですが、切る物という性格からは女性が毎日台所で持つ包丁がまず思い浮かびます。刀だけで考えると私も具体的には考えつきません。これは会場の女性の皆さんもいろいろ考えていらっしゃると思いますので、私も女性のご意見をぜひお聞きしたいです。

三城　刃物は易学で七という数字を表すそうです。女性はプレゼントが大変好きです。人に物を送るということが。それで刃物という切り口から思い浮かぶのは、ウエディングケーキにナイフを入れる、竣工式のテープカット、船の進水式で手斧で鎖を切る、というようなおめでたいときに使う刃物です。つまり刃物は幸福の「幸」に連想される。そうすると幸福の「福」には、福岡の市があると思います。そういうおめでたいことは愛のまち、愛東町につながるのではないかと思います。こんなラブリーな発想もまちづくりの大きなヒントになることでしょう。

（基調講演コーディネーター）

三城誠子〈みつしろ　せいこ〉
㈱明日絵（あすか）代表取締役（倉敷市在住）。倉敷市出身。1978年京都精華大学美術科デザインコース卒業。1994年倉敷市において、㈱明日絵を設立。グラフィック、CI、映像、環境デザインなどの企画・デザインで地域活性を展開。DAODA会員。岡山・地域づくり交流会会員。

当日配布されたアンケートの中での意見・感想の紹介

- 長船の刀を、まだ十分生かしきっていないと思う。長船の刀と同様に中世の福岡を宣伝する必要がある。町の名刺、封筒などに博物館の写真が使われているがもう少し分かりやすい軟らかいロゴを取り入れるべきではないか。　町内、男、77歳
- 歴史にもう一度光をあて、町民意識の高揚と連携を図りたい。CIによる町イメージを高める努力をしなければ。　町内、男、55歳
- 「刀」のイメージが拡がったような気がします。このシンポジウムが、今後の町政（特に刀のPR面、活性化の点で）に生かされるとよいなと思います。　町内、女、35歳
- 以前から思っていた事が、今回の安立さんたちの話で活性化に関しての話がありましたが、長船町の刀のネックは、バックボーンに産業が無いことで、そこらあたりを考えないと、ただ見せるだけの事では発展しないと思います。愛東町の奥村さんの行政に関する取り組み、素晴らしいと思う。ぜひ長船町も負けないように。　町内、男、47歳
- 私達の町です。職員の熱いハートで町を盛り上げられた愛東町をお手本に何か出来ればと思います。　町内、女、35歳
- 長船のシンボルは刀です。伝統はあるが親しみ薄いのでこのようなシンポジウムでアピールは良いことだと思いました。　町内、男、45歳
- 長船町でも職員の自発的活動として、愛東町のように十五人のプロジェクトチームで「さわやか行政委員会」を組織して電話応対や接客マナー、機関紙の発行をしているが、愛東町を参考にもっと頑張りたい。　町内、男、40歳

●DAODA（DAOデザイン研究会）とは、様々なデザイン活動を通じて、産業振興あるいは地域活性を行っていくための研究会として、岡山県産業デザイン協会（DAO）の会員の有志によって組織された任意の団体です。

住みよい住環境の整備

環境を生かした住みよいまちづくり

近代的な安全対策

世の中の流れが急成長から安定成長の時代へ移行するなかで、住宅を取り巻く生活環境や福祉の質の向上に対する要求も多様化・高度化しています。町民のこのような要望を的確にとらえて、安全で快適で住みよいまちづくりを推進します。

●交通安全

自動車社会の進展とともに交通事故は増加し、交通問題は深刻化しています。長船町では昭和五十九年に「シートベルトの着用推進に関する決議」、平成元年には「暴走族追放を決議」するなど、毎年積極的に交通安全対策を実施していますが、事故件数は残念ながらまだ増加傾向にあります。

町は人命尊重を基本理念に交通事故の根絶を目指して、とくに子どもやお年寄りなど歩行者の安全を確保するために、歩道の設置や交差点の改良、カーブミラーの設置など、安全施設を整備していきます。また町を取り巻く交通網の変革に合わせて、町道、橋、歩道自転車道などの生活道路網や、企業誘致にともなうアクセス道路、河川改修にともなう主要関連道路など幹線道路の整備も進めています。

交通安全思想の普及を進めるためには、生涯にわたる安全教育の実施や、町民一人ひとりが正しい交通ルールと交通マナーを習慣づけることなど、国、県、町と民間団体が一体となった交通安全対策が求められています。

●防　犯

明るく健全な社会をつくるため、防犯組合が結成され地道な防犯活動が根気よく続けられていますが、盗難や非行の低年齢化、不良行為の多様化など、事件は増加傾向にあります。町では町民の防犯意識を高める広報活動を進めるとともに、青少年問題協議会、青少年育成センターなどの関係機関と連携して、対策の充実に努めています。

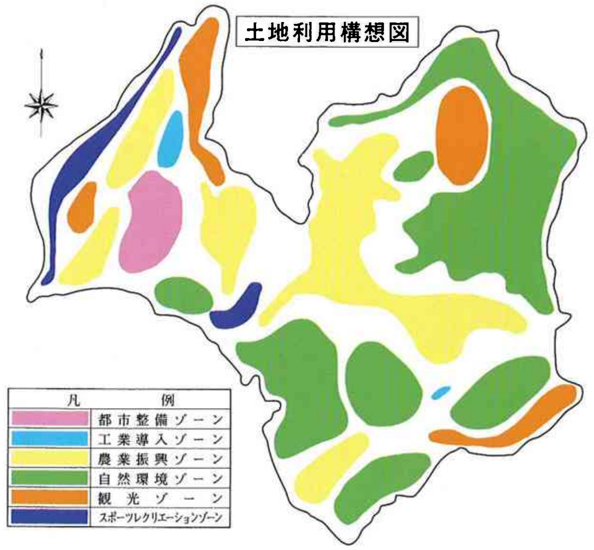
●消防救急体制

消防救急体制の充実のためには、火災をはじめとした災害に対応できる消防力の強化をすることと、すべての町民の防火・防災意識の高揚を図ることが大切です。あらゆる事故に対応できる救急・救助体制の充実と救急知識の普及によって災害のないまちづくりを進めていきます。さらに町の地域防災計画の一層の充実に務め、

邑久消防組合をはじめとした関係団体と連携して体制強化、施設や消防機材の整備を図り、消防力を強化した救急体制の充実が図られています。

●防災対策

長船町は近年、風水害によって大きな被害を受けました。この経験から、町民のかけがえのない生命や財産、町土を守り、安全で住みよい地域社会を築いていくためには、災害への意識を高め、予想される災害に対して万全の備えをしておく必要があるということを肝に銘じました。そして、災害再発防止のために、町内会を単位とした自主防災組織の強化育成や、緊急時の情報伝達体制の整備が必要になっています。



生活環境

子供たちといっしょにカチカチ「火の用心」

丸山少年消防クラブ世話役
小山悦夫さん

丸山少年消防クラブが今年、消防庁長官から表彰されました。丸山地区の子どもたちの防火意識を高めようと昭和56年に発足し、今日まで地道に続けてきた活動が評価されたものと、子どもたちはもちろん関係者一同、大喜びでした。主な活動は、毎年12月初旬の10日間に行う「火の用心」の夜回りです。日の暮れた午後6時ごろから拍子木をカチカチ鳴らしながら「火の用心」と大きな声を張り上げて歩く子どもたちの姿が、地区の大人たちの防火意識を高めていることはいうまでもありません。この他、消防団出初式への参加、夏休み中の邑久消防署見学を行っています。また各自で防火ポスターを描いて地区内に貼ったり、たたみ10枚分もある巨大なポスターを制作して話題を呼んだ年もあります。町内には南島と西岡地区にも少年消防クラブがあり、活動を通して成果を上げています。他の地区にも少年消防クラブが生まれ、その活動を通して火事のない安全なまちづくりが推進できる日を、私は楽しみにしています。

住みよい住環境の整備

環境を生かした住みよいまちづくり

近代的な環境づくり

●**道路網**

岡山県では高速自動車道、新幹線、空港などを利用した広域高速交通体系が確立されつつあり、長船町を取り巻く交通体系は大きく変化しています。こうしたことから、安全性、快適性、利便性の向上に努めながら、町内の交通をスムーズにする総合交通体系の確立を目指していきます。

町民の暮らしを支える生活道路については、町道、橋、歩道、自転車道の整備や、道路の緑化や美化運動を進めています。また、工業団地へのアクセス道路や河川改修にともなった幹線道路網も整備しています。

●**上下水道**

生活様式の変化や産業の発展などによる水需要の増大とともに、豊富でおいしい水が求められています。また水にも限りがあることを認識して町民自身が節水意識を高めながら、水を有効利用しなければなりません。

下水道は、計画的に処理区域を広げていきながら、計画区域外の地区では小型合併処理浄化槽の普及と農業集落排水事業を進めることで、河川の汚れをなくして生活環境の向上を図っていきます。

●**環境衛生と美化・緑化**

快適な生活環境は、町民が健康で文化的な生活をする上でいちばん身近な問題です。町では、花と緑の住みよいまちづくりを目指して「花いっぱい運動」を進めてきました。これからも、快適な居住環境づくりに努め、豊かな自然と田園風景を生かしながら地域ぐるみ緑化運動を推進するなど花と緑のネットワークを図り、美しい町並みを保全しながら衛生的で文化的な生活ができるまちづくりを進めていきます。

また、生活水準の向上と多様化にともなって増えるゴミは、分別収集を徹底しリサイクル運動の推進、省資源、省エネルギー運動を進めていかなければなりません。

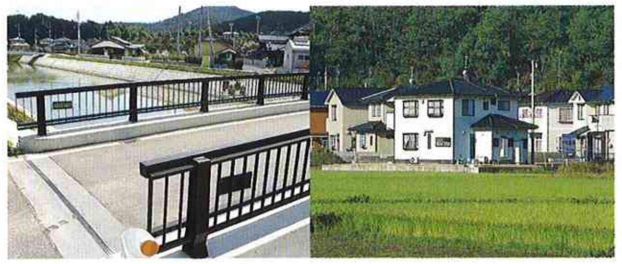
長船浄化センター

長船町クリーンセンター

●**土地利用**

長船町は岡山市のベッドタウンとして住宅地化と都市化が進み、農用地が減少傾向にあります。町の発展を支える土地を有効に利用するために、町中心部への管理機能の集積を目指した町並み形成、工業の計画的な誘致などを進めながら都市空間を創造していく必要があります。

一方で自然空間の保全と活用のために、広い緑地空間を観光整備に活用し、農地と森林は食料生産の場を基本に、町民にうるおいとやすらぎを提供するレクリエーション空間として活用していきます。



ベットタウンとして新しい住宅や施設が整備されている

のびやかで夢のある教育をめざして

心のふれあいを大切にするまちづくり

教育

●学校教育

これからのまちづくりは、原動力となる人づくりをいかに進めるかということにかかっています。地域づくりは人づくりといわれる今日、家庭や地域社会の教育との連携のうえに、二十一世紀を担う心身共に健康な青少年を育成していく必要があります。長船町は、学校教育についての町民の理解と関心が深く、施設や設備の整備も進み、子どもたちの学習環境の改善充実を積極的に進めてきました。

さらなる充実を願って、まず幼稚園では幼児期にふさわしい生活ができるよう、幼児の自発的な遊びを通した指導を中心に、一人ひとりの個性に応じた指導をしていきます。小学校と中学校では、児童と生徒の基礎学力の向上を図りながら、一人ひとりの個性や能力を大切にして、自ら学ぶ意欲と、社会の変化に自主的、主体的に対応できる能力を育てます。情報化社会に対応して、各学校にパソコンやAV機器を導入し、情報機器を活用する技術と能力を育て、また外国人教師を積極的に採用して、国際化時代に対応できる人材を育てる必要もあります。さらに、学校週五日制の実施による社会の変化には、新しい学校運営を切り開けるよう調査研究に取り組んでいきます。

●生涯学習

生涯を通してよりよく生きる――このような生き方の基礎を身につけようとすることが生涯学習の基本です。長船町でも多くの町民が自己の充実や生活の向上、社会への適応のために、「だれでも」「いつでも」「どこでも」「何でも」できる学習の機会を求めています。町では、生涯学習を通じて町民が積極的に参加して自主的に学習し、「心のふれあいを大切にするまち、長船町」の実現を目指します。

そのために、町独自の生涯学習推進方策の確立を図りながら、学習施設の整備、学習内容の充実、学習情報の提供、体制の充実、指導者の養成、学校や民間施設の開放など、学習の機会を体系的に整えていきます。

●青少年の健全育成

個性を生かした活力あるまちづくりには、二十一世紀を担う青少年の健全育成が欠かせません。長船町では家庭、地域、行政、学校が一体となって、青少年の健全育成を図ることを基本とし、それぞれの場でいきいきと活動できる環境づくりをしています。さらに、きめ細かな計画、広報活動とミニ集会などを実施して町民が一体となって推進する意識づくりをしていきます。

心のふれあいを大切にするまちづくり

中学校

公民館まつり

幼稚園

生涯学習

菊花展

小学校

より豊かな暮らしをめざして

心のふれあいを大切にするまちづくり

一遍上人絵伝

備前長船博物館

内部

文化

●文化財の保護

長船町は美しく豊かな自然環境のなかに、古代の先人たちが創造した須恵器、土師器、古墳や、中世に繁栄した福岡の市をはじめとした文化的遺産が数多く残されています。そして、武士の時代に「備前長船」の名を全国に知らしめた刀剣は、郷土の最も誇りとする文化遺産であります。町では備前長船博物館を中心拠点として、こうした貴重な文化財を大切に保存し、後世に伝えることはもちろんのこと、歴史や文化に対する町民の理解と郷土愛を深めるように努めてきました。これからも文化財の調査と保護に努めながら、とくに民俗資料の収蔵展示施設の整備を進め、町民の文化財保護意識の高揚を図っていきます。

●文化・芸術活動の振興

近年の生活水準の向上と余暇時間の増加などによって、ゆとりやうるおい、心の豊かさが求められるようになり、文化や芸術活動への関心が高まってきました。長船町でも地域の文化や伝統芸能の継承・復興に努め、町の誇りとなる新しい文化の創造が求められています。

長船町には備前長船博物館があり、町のメインイベント「びぜんおさふね名刀まつり」が定着し、新しい郷土芸能「備前長船名刀太鼓」が育ちました。これらの基盤を生かしながら、町民が心豊かな人間性を養い、創造的な生活を送れるように、文化・芸術活動に参加し、その成果を発表できる機会を増やしていきます。また優れた芸術・文化や外国文化など多様な文化に接する機会づくりも積極的に進めていきます。

●観光への波及

文化財保護や町民の文化・芸術活動などは独自の観光資源として「長船」の名を高めてきました。備前長船博物館はマイカーや定期観光バスを利用して全国から観光客が訪れています。「一遍上人絵伝」に描かれた福岡の市を、中世の大都市の名残を求めて歴史ファンが散策します。名刀まつりは町内外からの人出でにぎわいます。これからも町民の活動のなかから新しい観光スポットが生まれる可能性があります。例えば、和田久保町内会の「ホタルの里」づくり、西須恵の「レンゲまつり」「須恵器の里」づくり、油杉の「二十一世紀の森林」づくり、丸山の「ふるさと歴史公園」などなど。熱心な文化活動が町の観光の幅を広げていくことでしょう。

まがねふく吉備の中山
帯にせる
細谷川の音のさやけさ（古今集）

心のふれあいを大切にするまちづくり

文化

健全な人間性を育み、豊かな福祉をめざして

心のふれあいを大切にするまちづくり

●福祉

家庭や地域を取り巻く社会環境がますます複雑化している現在、社会的に弱い立場のお年寄りや障害者に対する福祉、町の未来を担う子供たちのための児童福祉、また母子・父子福祉など、ニーズは多様化し、広い意味での対策が求められています。すべての町民が心身ともに健やかな暮らしができるよう、地域社会のネットワークの確立やボランティアをはじめ、町ぐるみでの活動を進めています。

●保健

生活水準の向上や医学進歩などによって平均寿命の延びや青少年の体力向上が見られる反面、成人病の増加や低年齢化、高齢化社会への対応など、新たな健康づくりへの課題に対して効果的に応えられる体制づくりが必要になっています。長船町では、町民の主体的な健康づくり活動を推進するために、健康福祉まつりや地域保健特別推進事業を実施して意識の高揚を図っていきます。また、生涯を通じていきいきと暮らせるよう、各時期に応じた地域保健サービスの充実や、町民の保健データを入力して健康づくりに活用するシステムの導入などを進めていきます。

●高齢社会

人生八十年時代を迎えた今日、高齢者の健康と生きがいづくりの体制を維持・継続しながら、介護の必要なお年寄りの在宅福祉を充実・強化するために、老人保健福祉計画が策定されました。具体的にはお年寄りの社会参加を目指して、奉仕活動や美化活動などの地域活動への参加、工芸品や木工品づくりを体験できる交流の場づくり、世代を越えた交流機会づくりなどを進めます。また、老人クラブの育成、シルバー人材センターの充実と活用、余暇活動の促進なども積極的に進め、さらに在宅福祉を充実させるため、各種の在宅福祉サービスの充実、緊急通報システムの整備、介護ボランティアの養成などを図っていきます。

福祉・保健・医療

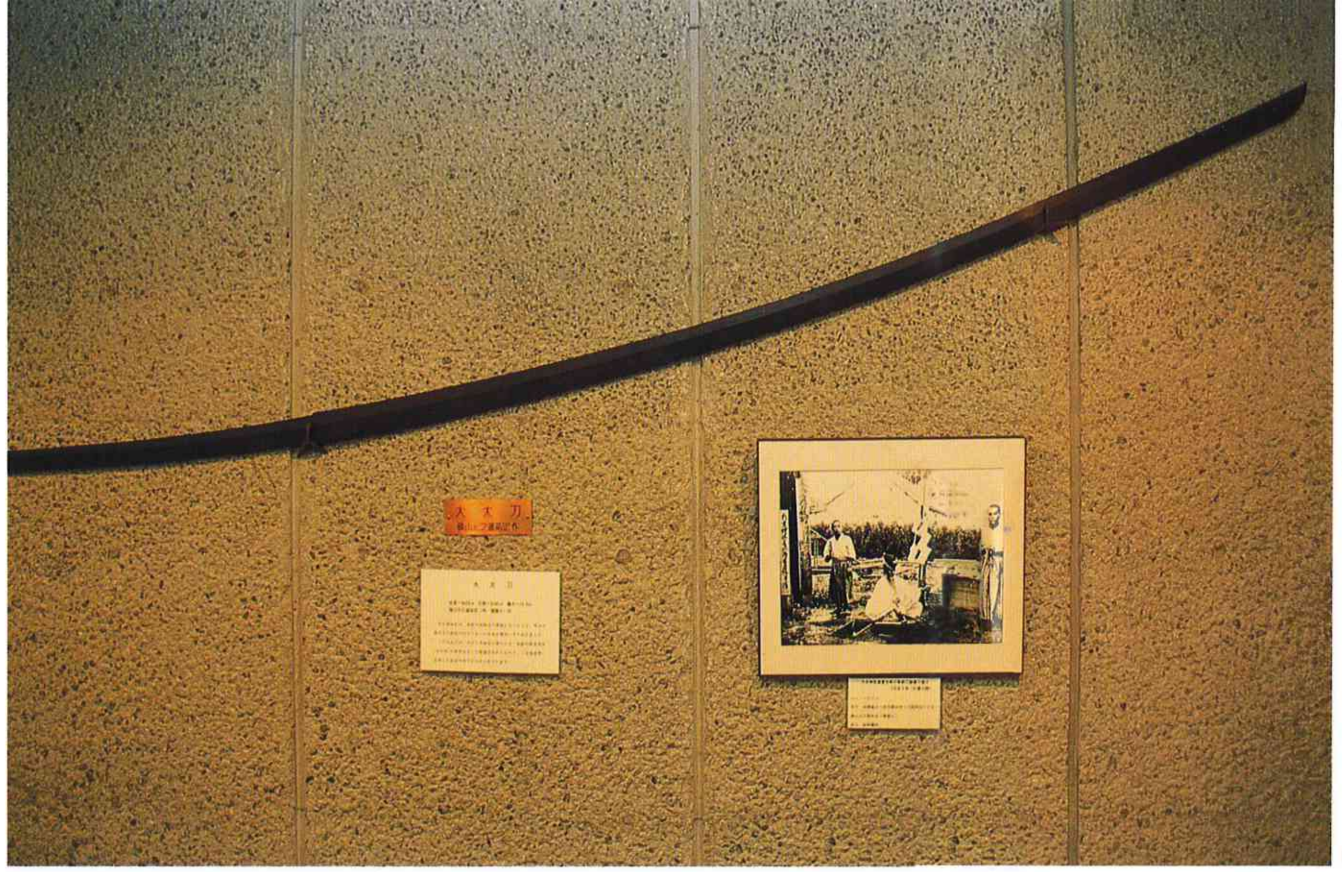
心と心のふれ合いが福祉の原点です

ヘルパー 小山律子さん

長船町では職員7人と登録ヘルパー5人が一人暮らしのお年寄りや介護の必要なお年寄り、身障者の方々の介護や援助を行っています。お年寄りの話相手になったり、相談事に助言したり、買い物を代行したり、移動入浴車で入浴サービスをしたり、活動の内容は多岐にわたっています。力のいる仕事ですが、週1回の入浴に「ああ、気持ちよかった」という声を聞くたびに「やっていてよかった」という充実感があります。ヘルパーの仕事は実際の活動を通して理解されつつありますが、町全体としては福祉に対する意識変革の過渡期にあるようです。介助してもらうのを恥ずかしいと思ったり、家族がいるのにサービスを受けることを負い目に感じたり、ヘルパーが来るから家を掃除しなくてはと気にしたり…。そういう遠慮はいりません。福祉は必要な人が利用するための制度なのですから、どんどんサービスを受けましょう。そのために町がいろんな設備を導入したり、ヘルパー制度を充実させたりしているのですから。私もいずれは高齢者になります。福祉サービスが必要になったら、すぐに相談しようと思っています。

「長船」の町の名と魅力をアピールして

豊かで活力あるまちづくり


大太刀（博物館内）

特産品売場（博物館となり）

観光への波及

平成二年度に実施した町民アンケートで、「あなたは長船町に魅力を感じていますか」との問いに、「どちらかといえば感じている」を含めて「魅力を感じている」と答えた人は六一・三％でした。次いで「あなたは長船町のどこに魅力を感じていますか」との問いには、「自然環境がよい」が三九・四％、「生活環境がよい」が一九・八％、そして「交通が便利である」と「すばらしい歴史がある」が同率の一二・五％でした。

これらの魅力を生かして、さらに大きな魅力にしようと、町独自の歴史、文化、伝統、産物などを基盤に、さまざまな取り組みが展開されてきました。

例えば「備前長船」として全国に知られる刀剣をまちづくりの核にと備前長船博物館が開館し、隣接の鍛刀場では月一回、若手の刀工たちが刀づくりを実演して刀剣愛好家に喜ばれ、ファン層を広げています。びぜんおさふね名刀まつりには、中世の「福岡の市」を再現するように、地元産の野菜や鮮魚、備前焼、刃物などが並びます。さらに元祖岡山ずしといわれる「どどめせ」を復活させたり、インド・熱帯アジア原産のヒユ科の一年草を原料にした「アマランサスせんべい」や、手作りの「名刀みそ」など、町の新しい特産品も誕生しました。

特産品づくりは人づくり

福岡の市の再現

特産品開発

長船はその昔、旧山陽道に接し、県北に産する砂鉄を運ぶ吉井川の水運に恵まれたことから、刀剣づくりという産業が発達しました。これは、「交通が便利である」という、当時の魅力を生かした特産品づくりに成功した例でしょう。ですから、町の新しい特産品は長船町の魅力から生まれるといえるでしょう。「魅力」をヒントに、どどめせや名刀みそに続けて、町民のアイデアで特産品を開発し育てていきたいものです。そういう活動が豊かで活力あるまちづくりを支えていきます。

どどめせ

アマランサスせんべい

豊かで活力あるまちづくり

観光・特産品

ヘルシー！おいし！楽し！が特産品づくりの秘訣

長船の味研究会
日下一子さん

長船町のおいしい特産品を作ろうと「長船の味研究会」で活動しています。「手づくりヘルシーせんべい」は、8年ほど前にメンバーが入手した南米産のアマランサスという野菜を原料に作りました。栄養価はホウレンソウより高く、アトピーにも効き目があるらしいところから健康的なせんべいを作ろうと、葉を乾かして粉にしてまぜたり、実や小さな葉をのせて絵のようにあしらったり、ニンジンの葉やゴマ、ユズ、ノリも使ってみたり、みんなで試行錯誤を重ねてきました。これからは包装や値段、売り方も考えなくてはという段階です。4年前に復元したどどめせは吉井川を高瀬舟が通っていた時代の料理で、岡山ずしの元祖ともいわれています。長船の郷土料理として普及していきたいですね。町のイベントの時に出品していますので試食してみてください。これからはソバを使った特産品づくりにもチャレンジしたいです。それから、これまで開発した特産品を売って、ちゃんと利益が出るようにしていくことも目標です。

新しい産業への取り組みへ、スタート

豊かで活力あるまちづくり

工場内に設けられた自由空間

工業の振興

岡山市近郊という位置的条件や山陽自動車道の開通などによって、長船町はますます都市化していくと予想されます。こうした状況に対応して、土地の有効活用と調和のとれた工業振興を図ってきました。若者の定着策として、積極的な企業誘致活動を展開した結果、優良企業の立地が相次いでいます。これからも工業用地を確保しながら、町の活性化につながる企業を誘致して工業の振興を図っていきます。

商業の振興

長船町の商業環境の変化は著しく、消費者は隣の市に流れる傾向にあります。この現状に対応して、魅力ある商店の形成に努め、経営の近代化、流通機能の整備充実を図るなど、積極的な振興対策に取り組んでいきます。そして、多様化・高度化する消費者ニーズに即した健全で近代的な経営の確立と、特色ある商店街の環境整備、商業活動を促進します。

近代的な工業団地とその内部

豊かで活力あるまちづくり

豊かな自然を生かして

豊かで活力あるまちづくり

農業の振興

長船町の農業は兼業化が進み、第一次産業の就業率が約九・六%と、都市的な様相を強めています。兼業化が進むなかで高齢者と婦人労働への依存が高まり、農業の担い手や後継者の不足が目立ってきました。生産基盤の農地は、農産物価格の低迷や転作などで減少傾向にありますが、土地改良事業によってほ場整備率は向上しています。今後もほ場整備を進めるとともに、排水対策による乾田化を進めていく必要があります。また、農村地域社会を豊かで活力に満ちたやすらぎのある定住地域として確立するために、備前市と郡内三町を広域的に結ぶ幹線農道などの具体化が急がれます。このような農業基盤や生活環境の整備、地域の連帯感を強化することなどによって、各地域の特性を生かしたまちづくりを進めていきます。

● **新技術の導入**

二十一世紀の田園のまちづくりを目指して、産業として成り立つ生産性の高い農業を目標に、これからの新しい農業を模索し、機械の効率的活用や新技術の導入などによって生産性を高め、ほ場整備や排水対策など生産基盤の整備をしていきます。また、生産物の地場消費を図るために生産流通組織を育成していきます。

● **人材育成**

長船町には、酪農や農業に熱心に取り組む青年らが結成した「田々虫(でんでんむし)の会」があり、うまい長船米や特産物づくりの技術や経営改善について研究したり、休耕田を利用して有機無農薬栽培の効果を実証したり、幼稚園児を招いてイモ掘り大会などのボランティアに取り組んだりと積極的に活動し、高く評価されています。このような若手の後継者を幅広い知識や新しい技術の研修などを通して、新しい農業の担い手や将来の集落内リーダーに育てていきます。さらに、農用地利用増進事業による農地の流動化を促進しながら、農作業受委託によって中核農家の育成を進める必要があります。

カントリーエレベーター

農業

時代にあった「ニュー長船ブランド米」づくりが私の夢

岡山県農業士
藤澤美芳さん

農業は米の自由化や後継者育成などいろいろな課題があり、長船町では兼業化が進んでいます。私は昭和59年に県の農業士に認定され、農業の経営安定に努力してきました。規模拡大を続けて現在は水田が約10ha、裏作にビール麦を7ha、野菜はナスを出荷しています。これからの課題の一つに営農組合の設立があります。これは例えばコンバインなどの機械を組合で購入してみんなで使うことで、一戸当たりの負担を小さくでき、担い手のない水田を有効に利用して規模拡大を進められ後継者確保が期待できるなど、農業の未来を明るくするしくみですので、ぜひ進めていきたいです。町の「緑を絶やさない田園のまちづくり」にも貢献できますし。もう一つ取り組みたいのが時代に合った米の品種づくり。長船町は昔から吉井川の恵みであるきれいな水と肥沃な土から味のよい米を作ってきましたが、消費者の嗜好は時代とともに変わります。まず町民のニーズに合う米を、品種選びから根本的に見直して作ってみたい。長船町では長年栽培された「あけぼの」に続くヒット銘柄を作ることが私の大きなテーマです。

一年中がおまつりさわぎ元気で豊かなまちづくり

豊かで活力あるまちづくり

秋祭り

びぜんおさふね名刀まつり

観光対策

長船町は、自然の保護と活用を基調として観光資源を掘り起こし、新しい魅力づくりに努めています。その実現のために、観光関係者だけでなく町民が役割を分担して魅力を演出する景観や生活環境づくりを進めていきます。例えば、吉井川の広い河川敷を利用した各種イベントの開催、四辻山や磯上油杉周辺を整備した自然体験型レクリエーションゾーンの形成など、可能性は広がります。また、文化財の保護や文化・芸術活動の振興が新しい観光資源として期待できます。例えば、福岡の市の活用、須恵器の里と土師器の里のPR、町特有の名物料理の研究開発など、可能性を秘めたテーマが多くあります。これらの町の個性を生かして、魅力ある観光地づくりが期待されています。

●年中イベント・祭り

五月の西須恵れんげ祭りは年々盛り上がりをみせます。長船まつりは八月上旬に開かれる町民参加の夏祭り。太鼓演奏や子どもみこし、盆踊り、打ち上げ花火など、もりだくさんです。同じ八月の牛文蚊帳無し踊りは、諏訪神社に伝わる踊りで、昔から地域の人のふれあいの場でもあります。九月はふるさと産業まつり。十月は町民体育祭と、各地区で秋祭り。福岡の秋祭りには伝統のだんじりが復活しました。そして、十一月に開かれるのが、町のメインイベント「びぜんおさふね名刀まつり」。備前長船の名を全国に広めた往時の刀匠たちの慰霊祭に始まり、各種のショー、福岡の市の再現、鍛刀実演などを数千人の人が楽しみます。

長船まつり

諏訪神社まつり

豊かで活力あるまちづくり

観光・イベント

町長あいさつ

松村　敏夫

　昭和三十年に美和村、国府村、行幸村の三村が合併し、現在の長船町が誕生して今年で四十周年を迎えました。
　長船町は肥沃な土地と吉井川の水に恵まれ、四季が織り成す自然景観の美しい町です。また、刀剣王国としてその名が全国に知られ、福岡の市跡や町並み、古墳、社寺など数々の文化遺産が残されており、観光面でも他に抜きに出たものがあります。
　町では、「うるおいとやすらぎ　健康で文化的な地域づくり」を町政振興の基本方針として、三つのK（景・慶・経）を重点目標に、生活基盤の確立、生活環境の整備、企業誘致、高齢化に伴う福祉、子供たちのための教育施設の充実など、さまざまな問題に、積極的に取り組み、快適で住みよいまちづくりを推進してまいりました。
　また社会情勢の著しい変化に伴い、町を取り巻く交通網も大きく変化し、これによって経済面、社会面においてもめざましい発展を遂げ、年々人口も増加しています。四十周年にあたり、決意を新たに、二十一世紀に向けてさらなる飛躍を目指し、町民のための行政を進めてまいりますので、今後も皆様方の温かいご支援とご協力をお願い申し上げます。
　最後に本誌発行にご協力くださった方々に厚くお礼申し上げごあいさつといたします。

平成七年十二月

長船町長　松村　敏夫

春

吉井川や千田川の土手にタンポポが咲き、桜の名所に花見客が訪れるころ、町の道べりや駅の花壇、民家の軒下にパンジーやキンセンカが色とりどりに咲きそろいます。いろんな団体が手塩にかける花いっぱい運動のおかげで、文字通り町が花でいっぱいになり、花色に染まります。

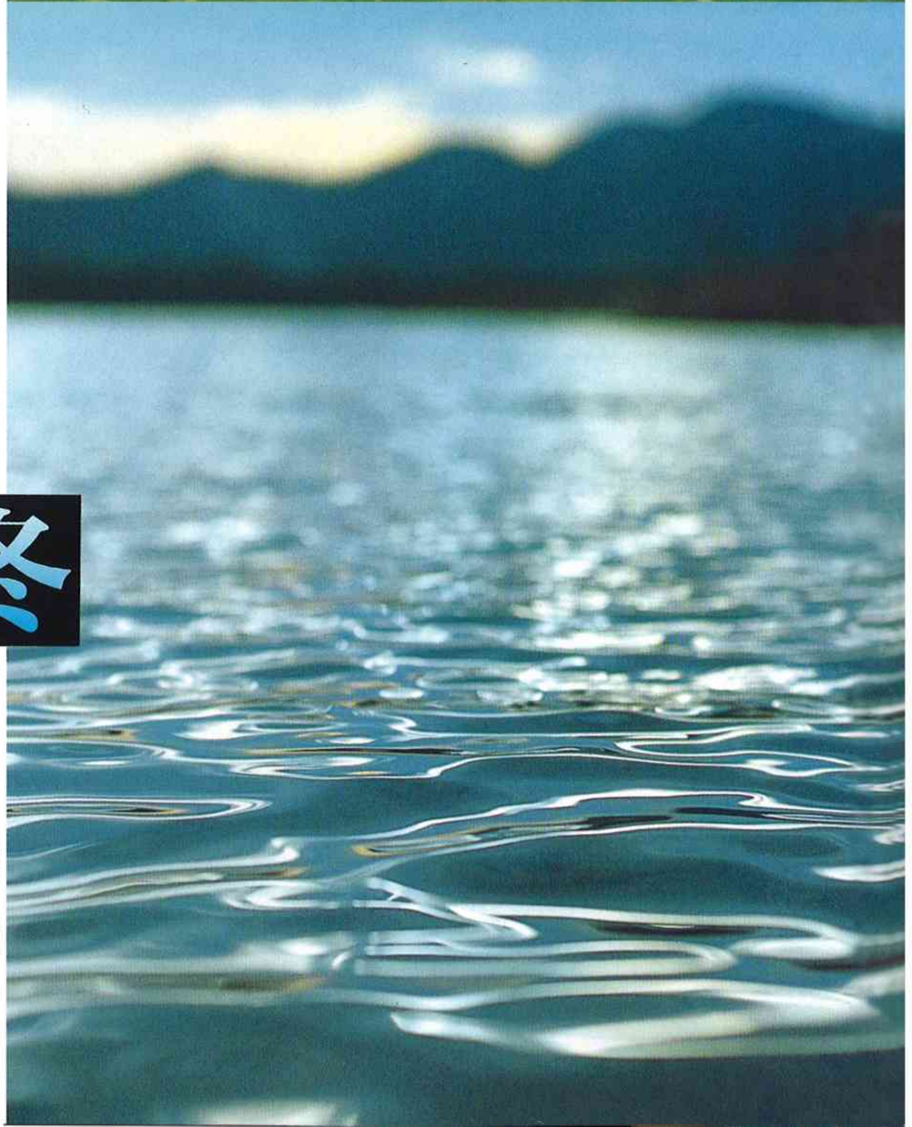
夏

暑い夏を楽しく過ごそうと、各所で納涼まつりが開かれます。町内会で、団地で、保育園が、子供会が、ＰＴＡが、母親クラブが…。そして最後に長船まつり。子どもみこしがワッショイ、ワッショイ。盆踊りの輪が広がり、名刀太鼓が勇壮に響き、花火がドドーンと上がって、元気に暑さを吹き飛ばします。

秋

町中の稲田が黄金色に輝く秋は、祭りの季節。ＪＡを中心にふるさと産業まつり、体育の日には町民体育祭、そしてメインイベントは「びぜんおさふね名刀まつり」。長船町の町民であることを喜び、住んでいることを喜び合い、これからも「元気にやろうえ」と誓い合える祭りです。

冬



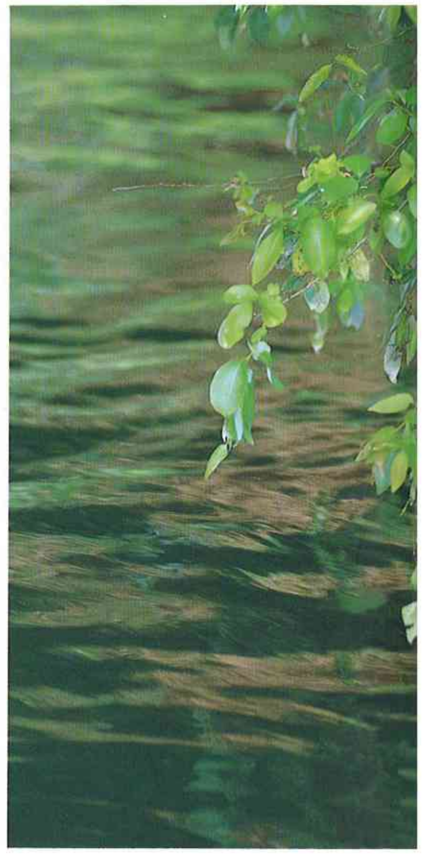
長船町の初日の出は町の東の四辻山を越えて昇ります。「長船町日の出を見る会」の人たちは、元旦の朝が明ける前にこの山に登って、初日の出を待ちます。やがて東方の播磨灘をおおう雲間が一点赤くなり、光を増して輝くと、みんな手を合わせます。「今年も良い年でありますように」

HOP

〝ピョンと軽く跳んでみます。〟
町民一人ひとりの小さな挑戦の始まりです。
あなたの目標は、近くに見えていますか。
それとも遠くにあって、霞がかかって見えませんか。
たとえかなたに霞んでいても、
「千里の道も一歩から」。

何を始めるにも、最初の第一歩から始まります。
私たちの郷土、長船町も、一歩一歩のあゆみ、
一つ一つの積み重ねで、現在があるのです。
水田をこんなに広く開拓した人たちや、
道をこんなに長く切り開いた人たちを見習って、
大きく一歩を踏み出そう。

おだやかな川の流れを守り続けたい

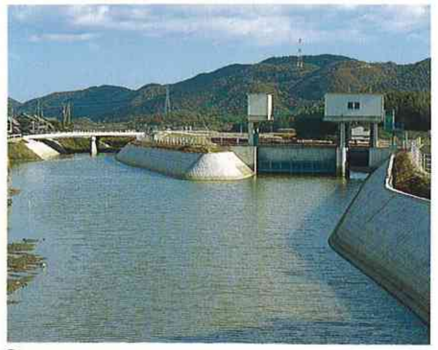


平成2年の大水害

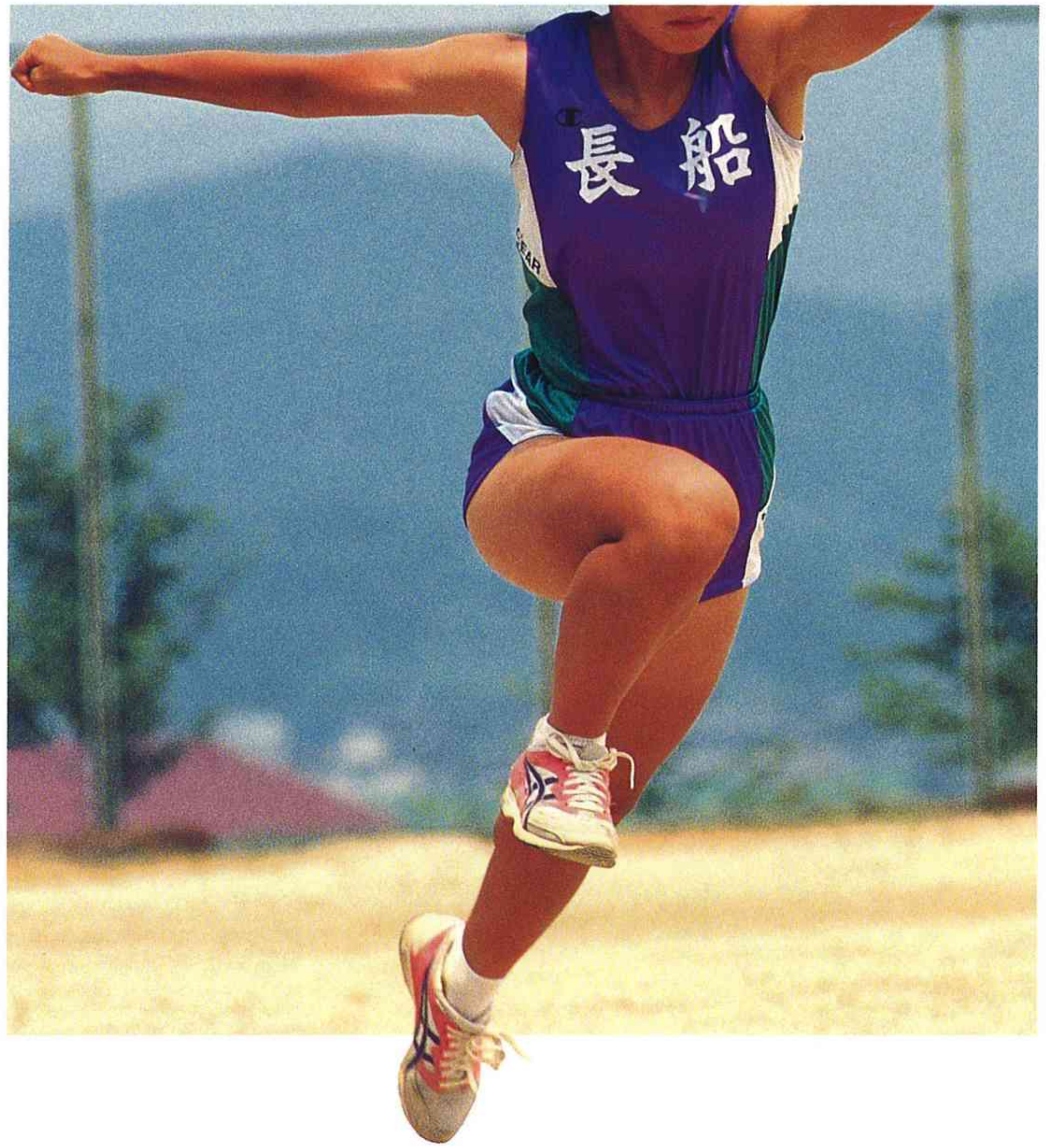
現在の風景

長船町は、吉井川の豊かな水に恵まれ、遠い昔からその恩恵を受けながら発展してきました。しかし、過去に台風豪雨によるたび重なる大洪水に見舞われ、多大な被害も受けました。二度とこのような災害を繰り返さないために、町では治山治水対策に力を入れ、防災体制の充実を図っています。

現在では美しくおだやかな河川景観を取り戻していますが、今後も町民の皆さんが安心して暮らせるように、町だけではなく地域ぐるみの防災活動や一人ひとりの防災意識の高揚が求められています。



STEP



〝一歩一歩着実に大地を踏みしめ、行進を始めます。〟
この大地は、自然の恵み豊かな地。
この道は、先人が汗水流して切り開いた道。
行く先に、私たちの希望が見えます。
一人ひとりの小さな一歩が勇気と団結を生み、

仲間を増やしながら、前進していきます。
目を輝かせ、情熱を秘め、
エネルギーあふれるその姿は、
四十周年を迎える長船町の姿でもあります。

JUMP

〝思いっきり未来へ向かっての挑戦です。〟
小さな一歩から着実に進歩した勢いは、
町民一人ひとりの燃える情熱を集めて、
大きなエネルギーとなり、澄みきった青い大空
に向かって、予想もできないほどの跳躍を見せ、

西暦二〇〇〇年に雄飛する長船町の姿です。
子どもたちの歓声が響きます。
若者ののびやかな肢体が跳ねます。
お年寄りの笑顔が輝きます。
みんなの喜びがあふれています。

町章

この町章は、全国に名高い備前長船の名刀に因んで、刀の鍔を図案化したものである。中の３つの円は、行幸、国府、美和の３村を指す。

町民憲章

わたしたちは、千古の歴史に誇りをもち豊かな未来を約束された長船平野の緑の中で生活している長船町民です。この憲章をくらしの合言葉に、みんな手をとり合って、住みよい町をつくりましょう。

一、健康を大切にし、たくましく生きる心と体をつくりましょう。
一、働くことに喜びと生きがいをもち、楽しい職場をつくりましょう。
一、郷土の伝統を生かし、新しい文化の創造に努めましょう。
一、信頼と愛情を深め、明るい社会と、家庭をつくりましょう。
一、秩序と規則を守り、平和で希望に満ちた、町をつくりましょう。

（昭和52年11月３日制定）

町花・町木

町花・きく

町木・くろがねもち

「風の街道・おさふね」

平成７年発行
【編集・発行】
長船町
〒701-42 岡山県邑久郡長船町土師291
TEL (086926) 2001
【企画・印刷】
株式会社 明日絵
TEL (086) 425-3903
【協力】
書家 雪吉春昧「地・炎・水・風」
DAODA (DAOデザイン研究会)

住民総参加の開かれた行政をめざして

住民の立場にたった議会運営

●長船町行政組織図

- 町長
  - 助役
    - 総務課 — 消防係／庶務係・財政係・行政係
    - 企画課 — 企画係／地域振興係
    - 税務課 — 賦課係・徴収係
    - 環境課 — 環境係（クリーンセンター／衛生センター）／下水道係
    - 保健課 — 保健係
    - 住民課 — 国保係（美和診療所）／住民係／福祉係（老人憩の家／保育園／美和会館）／年金係
    - 産業振興課 — 農林計画管理係・工務係・商工係／農地係・農業共済係
    - 土木課 — 土木係
  - 収入役 — 出納室
  - 水道課 — 水道事業

教育委員会

- 教育長
  - 教育総務課 — 学校教育係（幼稚園／小学校／中学校／学校給食共同調理場）／庶務係
  - 社会教育課 — 社会教育係（中央公民館／備前長船博物館／美和教育集会所／運動広場／勤労者体育センター／Ｂ＆Ｇ海洋センター）

- 監査委員 — 監査委員室
- 選挙管理委員会 — 事務局（総務課）
- 農業委員会 — 事務局（産業振興課）
- 固定資産税評価審査委員会 — 事務局（税務課）

●名誉町民

表彰年月日	氏名	生年月日	事歴	備考
昭和41年 5月3日	故 今泉（いまいずみ） 濟（わたる）	明治31年4月21日	刀匠（刀匠名 俊光（としみつ））	死亡 平成 7年 8月28日
昭和41年 5月3日	故 戸田（とだ） 髙吉（たかきち）	明治 7年3月10日	教員 茶花道師範	死亡 昭和54年 9月17日
平成 3 年 6月2日	故 日下（くさか） 連（むらじ）	明治35年9月26日	医学博士 国立岡山病院名誉院長	死亡 平成 4年12月31日
平成 4 年11月3日	平井（ひらい） 方策（ほうさく）	明治44年2月 2日	医師	

<資料：総務課／平成7年9月1日現在>

議長あいさつ

町議会は、住民の代表として定数十六名で構成されており、年四回（三月、七月、九月、十二月）の定例会と必要に応じ臨時会が開かれます。

町行政の意思を決定する機関で、条例の制定や改廃、予算などを審議し住民の生の声を反映できるよう、議会運営委員会と総務、産業土木、文教厚生、各常任委員会で、それぞれ専門的に調査、検討が加えられ本会議において決定されます。

石原純髙

●議会の構成

- 議会
  - 議会運営委員会
  - 常任委員会
    - 総務常任委員会
    - 産業土木常任委員会
    - 文教厚生常任委員会
  - 議会事務局

●町議会議員

議長	石原 純髙	
副議長	小村 豊正	
議員	北谷 幹夫	運営委員長
〃	島村 則夫	建設特別副委員長
〃	石井 隆	文教厚生委員
〃	久米 一郎	産業土木委員長
〃	茂成 敏男	建設特別委員長
〃	青山 定雄	文教厚生委員長
〃	竹原 宗男	産業土木副委員長
〃	初治 晴夫	文教厚生副委員長
〃	山本 博宣	総務副委員長
〃	田中 豊作	総務委員長
〃	岸 敏雄	総務委員
〃	丸田 泰宏	総務委員
〃	平原 順二	文教厚生委員
〃	清家 隆宣	文教厚生委員